
仮面ライダーオーズ×ひぐらしのなく頃に 永崩し編

カイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーオーズ×ひぐらしのなく頃に 永崩し編

【Nコード】

N6921T

【作者名】

カイル

【あらすじ】

ある「オーズの世界」で戦っていた神童永司はアंकと共に異世界に来た。そこは1人の少女が運命にあらがっている世界だった。・
・
・

プログラグ(s i a e ひ ら し) (前書き)

まずはプログラグをどうぞー!!

プロローグ (side ひぐらし)

昭和58年6月・・・またこの季節がやってきた。無限のループで生きることを諦めていた私だったが前回・・・『皆殺し』のカケラで学んだことはみんなが強力すれば奇跡は必ず起こること。でも私とあつあつとうるさいオヤシロさま・・・

「あつあつあつあつ！！梨花ひどいのです！！あつあつ！！」

はあ、この羽入のカケラを渡る・・・ループの力はほとんどない。事実、ループしても残りの時間は少なくなるばかりだ。この世界でアイツと・・・鷹野と決着をつけないといけない。そのためには仲間がいる。だから・・・

・・・夜 古手神社・・・

「・・・という事です。強力してくれませんか入江、富竹。」

私はいつも惨劇の引き金になる富竹と現在、L5を発症し治療を受けている悟史の安全を確保するのに欠かせない入江に強力を依頼した。2人とも啞然としている。まあ、当然だろう。

「その話は本当なのかい梨花ちゃん？」

「そ・・・そうですよ！！鷹野さんが本当にそんなことを・・・!？」

やはり部活メンバーと違いそう簡単には信じてはくれないか・・・
。分かつてはいたものの・・・なんだかムカつく。

「その話、信じた方がいいですよ。」

「んっふっふっふっ、そうですねよ。彼女の話をしつかりと聞いておいた方があなた達にとっても有益な事です。」

後ろを振り向くといつもの口調で話す大石と……赤坂がいた。

「赤坂……!!」

「はは、ずいぶん時間をかけちゃったけど……君を助けに来たよ!!」

私は泣きながら赤坂に飛びついた。

……

……

……

「なるほど……つまり、相手は山狗。そして鷹野三四。そういう事だね梨花ちゃん。」

「はいなのです。鷹野は難見沢症候群の研究を止められそうになつて暴走してる状態になってるのですよ。」

私はループなどの事を伏せ、これまでの世界で得た情報を話した。大石には園崎が黒幕という考えは間違つてるとしつかり言い放つた。彼は敵や中立だとしを招く疫病神だが味方だと最善を尽くそうと

してくれる。つまりは味方にして損はないのだ。そして私たちは今後の事を話し合っていた。そんな時、羽入が空を飛んできた。

「梨花、梨花！！大変なのです！！」

（いったいどうしたって言うの羽入！？）

「僕以外にも人ならざる者の気配がするのです！！あうあう！！」

（なんですって！？）

羽入以外の人ならざる者……！？そんなの今までなかったわよ！？

「皆、少し沙都子が気になるのです。一回、様子を見てきていいですか？」

「構いません。我々はここで待っていますので。」

入江の声に皆が頷いた。そして私は羽入の案内に従い走っていく。そうしてるうちに何か灰色がぼやけたようなオーロラがある場所についた。

「何なの……一体……！？」

私はそのオーロラに触れようとする。しかしその前にそのオーロラから何かが飛び出してきた。私は驚きしりもちをついてしまうが問題はそこじゃなかった。

「グギッ……！？」

・・・飛び出してきたのは化け物だった。その化け物はまっすぐに私に向かってきてその腕を振り下ろそうとする。

「梨花！！」

羽入の声が聞こえる。ああ、私はこうやって死ぬのか。この世界は私にあらがうことさえも許さないのか。そう思い私は目を閉じた。・・・しかし、いくらたっても体に殴られた感覚は来なかった。私は恐る恐る目を開ける。すると、怪物は近くの木にぶつかっており私の目の前には・・・

「大丈夫！？」

妙な形のバイクに跨った男が代わりにいた。そしてその近くには金髪のガラの悪そうな男もたっている。羽入は訳がわからずあたふたして話せる状態じゃなかった。無論、私も呆気にとられているのであろう。

「永司！！！？この世界？がどんな世界かは知らないが・・・連れてきちまったヤミーはかたづけろ！！」

「分かってる！！」

永司と呼ばれた男は懐から何かを取出し腰につける。そして、三枚のメダルを取り出すとそれに装填しベルト右側にあったまるいもので読み取って行った。

？タカ！！トラ！！バツタ！！タ・ト・バ！！タトバ、タ・ト・バ！！！！？

そして男は……異形の姿に変身した。

プログラグ(s i d e ひびく) (後書き)

次回はオーズside!!

プロローグ (sideオーズ) (前書き)

前回、別の作品と間違えて登場人物紹介と打ってました。どうもすいません……

ブローグ (sideオーズ)

・・・鴻上ファウンデーション・・・

「え・・・どうゆう事ですか？」

永司とアंकは朝矢に連れられ鴻上ファウンデーションの会長室に
来た。そして会長である鴻上光生に会っていた。

「つまり・・・我々のメダルシステムを使用する代わりに、私から
の依頼を引き受けてくれないかな？」

「えっと・・・俺はいいですけど、アंकは？」

そのアंकは少し考え込んだ後返答する。

「いいだろう・・・ただし、コアメダルの情報は逐一俺のモバ
イルに送ってもらおう。」

「さすがはグリッド、欲望に忠実だ・・・良いだろう!!オーズ
のコアメダルを集中するのも我々の目的の一つ!!我々の協力関係
の誕生だ!!ハッピー、バーースデー!!!」

鴻上はケーキを取り出しながらそう叫ぶ。そのケーキには周りに手
乗りサイズの箱2つと複数のカンドロイド、そして中央にクワガタ
のコアとゴリラのコアが置かれていた。

「それは・・・コアメダル!？」

アंकは驚愕したまま固まる。鴻上は不敵に微笑みながら話し始める。

「残念ながらアंकくん、君のコアを我々は所有していないためプレゼントとして送ることはできないが我々が入手したこの2枚は君たちにプレゼントしよう。そしてさっそく依頼だ!!カンドロイドはオプシヨンだがこの?携帯型ライドベンダー?のモニターになつてはくれないかな?」

鴻上は携帯ベンダーの片方を持ち上げると背後のボタンを押す。その瞬間、携帯ベンダーは通常サイズのベンダーになる。

「おお………すごい!!」

「成程な………要はそつちの奴のテストをしろつてことか………」

永司はキラキラした目でベンダーを見ている。アंकは不敵に笑いながらカンドロイドをその手に取る。

「会長………そのベンダー、テスト終了後はどうなさるおつもりで?」

「無論、君たちへの贈り物だ!!ただ、カンドロイドのエネルギーはそのベンダーで補充してくれたまえよ。」

つまりは普段はベンダー内に保管しておき必要時にセルで取り出すということ。永司はコアを手に取りアंकに投げる。

「アंकほら、コアメダル。」

アंकはクワガタとゴリラを体内に入れると代わりにタカ、トラ、バツタのメダルを投げる。

「おっと!？」

「永司、俺が居なくても最低限は変身できるようにしとけ。お前が変身せずにお陀仏はこっちとしても困るからな。」

アंकは悪態をつきながら会長室を後にする。永司は朝矢と鴻上に一礼するとアंकを追いかけていった。

「……会長、神童がオーズになってすでに数日が経過してます。彼は何ともないのでしょうか？」

朝矢が鴻上に尋ねる。しかし鴻上は笑みを浮かべたままこう話した。

「今はまだ分からない……だが、いずれオーズは無限をも超越する存在になる!!」

……車道……

「おおー！ー！今までの奴より走りやすいなこれ!！」

「恐らくは今までお前の搭乗データをフィードバックしたんだろうな。」

永司とアंकは早速携帯ベンダーで走行していた。アंकの言うとおり、このベンダーはこれまでのデータが使用されているため通常の物よりも性能は上だ。

「……………っ！永司、ヤミーだ！！」

そんな中、アंकがヤミーの気配を察知する。そして目の前にそれは現れた。

「アंक！？ちい……………」

アリヤミーは永司たちを目視すると全力で逃亡。永司たちはそれを追いかける。しかしその目の前に灰色のオーロラが出現。ヤミーはその中に消えた。そして二人は減速できずそれに突っ込んでいく。

「永司！！これは異世界への扉だ！！」

「っ！？これが……………うわあああああ！？？」

そして永司たちの姿は消えた。

……………雛見沢……………

オーロラをくぐった先にあっただのはどかな村。だが目の前で少女がアリヤミーに襲われかけていた。

「……………いけない！！」

永司は迷うことなくベンダーでアリヤミーを跳ね飛ばし少女を助ける。

「大丈夫！？」

永司は少女に声をかける。そんな永司にアングが大声で話す。

「永司!!!この世界がどんな世界かは知らないが……連れてきちまったヤミーはかたずけるぞ!!!」

「分かってる!!!」

永司は懐からドライバーとメダルを取出し変身する。

「変身!!!」

?タカ!!!トラ!!!バッタ!!!タ・ト・バ!!!タトバ、タ・ト・バ!!!?
!!!?

仮面ライダーオーズへと……

プロローグ (sideオーズ) (後書き)

次回から本格的に始動だ!!

第1話 始まりの000 (前書き)

という訳で開始です!!

第1話 始まりの000

アリヤミーは立ち上がるとオーズに向き合いながら戦闘態勢を取る。

「オーズ……!!」

対するオーズもトラクローを展開しいつでも戦えるようにしている。

「アंक、女の子？2人？頼む!!」

「たく、おいお前らこっち来い!!」

梨花はその言葉に驚いた。そして羽入も。

「僕が……見えるのですか!？」

「あ？何言ってる……？早く来い!!」

アंकは右腕で梨花を抱えるとすぐに跳躍。ヤミーと距離を取る。

羽入も梨花についていきオーズとヤミーの戦いを見ていた。

「はあ……!」

「ギガッ……!」

アリヤミーはトラクローを受け止め、オーズに蹴りを放つ。オーズもこれを足で受け止めもう片方のトラクローで引っ掻いた。

「ぐ……!!?」

引つ搔かれた傷口からセルメダルがこぼれる。しかしアリヤミーはそれ以上の追撃を許さない。小回りが利く動きでオーズの蹴りやパンチを避けていく。

「あらっ!?!?.....あれ!?!?」

「ちっ.....すばしっこいな。永司、コイツで動きを封じろ!?!」
アंकはクワガタのメダルを取り出すとオーズに向かって投げる。

「おっと!?!?.....よし、やってみる!?!?」

オーズはタカをクワガタに入れ替えるとオースキャナーでメダルを読み取っていく。

?クワガタ!!トラ!!バツタ!!?

「はああああ!?!?!」

ガタトラバにチェンジしたオーズは角から緑色の雷撃を放つ。

「ぐおおおお!?!?」

広範囲に放出される雷撃はさすがに避けきれなかったか、アリヤミーは体中に電撃を受けて倒れこむ。

「よし.....アंक、チーターで一気に決める!?!」

「分かった。さっさと決めるよ!?!」

アंकはオーズの要望に応えチーターのメダルを投げる。オーズは素早くつかみ取るとバツタと取り換えスキャンする。

？クワガタ！！トラ！！チーター！！？

オーズはガタトラーターにチェンジすると同時にメダルを再スキャンする。

？スキャンングチャージ！！？

オーズは雷撃を体にまといながら最大にまで力を貯めたチーターレツグで一氣に加速。その速さは目に見えなくなりそして……

「あああああああ！？？」

一瞬、閃光が走ったかと思えばそこにはトラクローで切り裂かれ爆散するアリヤミーとトラクローで加速を止めたオーズがいた。

「ふう……」

オーズは変身を解き永司の姿に戻る。そして梨花たちの方向に歩み寄る。

「大丈夫？怪我とかない？」

「はい……大丈夫なのです。」

梨花はいつも通りに返す。しかし、永司はその鋭い観察眼から梨花のその口調をおかしいと看破する。

「……なんで本当の話し方で話さないの？それに……その角みたいな髪飾り付けてる子、なんで体が透けてるの？」

「「！！」」

梨花と羽入は驚いた。自分の偽った口調を見破り羽入が実体のないということに気付いている事に。

「人の気配がお前たちからはしないからな。特に角の方。お前は人間じゃないな？」

さらにはアंकまでもが看破してくる。梨花と羽入は諦めて真実をこの二人に話すことにした。……ただし条件付きで。

「本当の事を話してもいいけどあなた達の事もきっちり話してもらおうよ？」

「分かったよ。アंक、説明よろしく。俺は飛び散ったセルメダル集めるよ。」

「仕方ねえな……。」

……それから10分後……

「にわかには信じがたい話ね。」

「それはごつちもだ。」

あれから互いの情報を包み隠さず交換した両者。そして永司は彼女

が殺されると聞いてから頭の中にあの内戦の光景が浮かび続けた。

「……………」

ルウ…………永司が村を訪れたとき、最初に心を通わせた少女。そして内戦で目の前で死んでしまった少女。今の梨花とルウとが重なって見える永司は強い意志を込めてこう言い放つ。

「俺も…………君の力になる!!」

「み…………?」

アंकはやれやれといったような顔で永司を見るがその表情は笑っていた。

「相変わらずのお人よしだな永司。だが、俺達が元の世界に変えるにはこの世界で俺たちがやるべきことをやらないといけない。ここは協力するのが得策だな。」

梨花たちは純粹に驚いた。見ず知らずの自分たちにここまで言う彼らに。

「ホントに…………協力してくれるんですか?」

「もちろん!!」

梨花は涙があふれるのを止められなかった。これまで何度も仲間の疑心暗鬼で苦しんできた。そうした過程があったからこそ今の希望はある。しかし彼らは初対面にもかかわらず自分を信じ、協力して

くれるといった。それがうれしくてたまらなかった。

「それに……羽入ちゃんも実体化した方がいい。」

「え……?」

「君もこれまで頑張ってきた。だったら、最後までいいは傍観者じゃなくて参加者としてこの惨劇に立ち向かおうよ。」

「でも……僕が出たところで……」

永司は真剣な表情で告げる。

「やらないで後悔するよりやってみて後悔した方がいいよ。やらなかったらその後悔は一生残る傷になっちゃう。だったらダメもともいい。まずは行動することが大事なんだ。」

この言葉は羽入の心にしっかりと届いた。そして彼女は……

「分かりましたです。僕も、最後まで精一杯あがいてみるのですよ……!」

この瞬間から傍観者をやめ、惨劇の参加者としてこの世界に加わった。

……古手神社……

「皆、お待たせなのですよ……!」

梨花が赤坂たちのもとに帰ってくる。

「梨花ちゃん!!・・・と、そっちの3人は?」

「紹介するのです。僕の遠縁にあたる女の子の羽入ですよ。」

「ふ・・・古手羽入です!!よろしくなのです!!」

羽入はぎこちないが赤坂たちにお辞儀をした。

「羽入・・・?そんな子、聞いたことありませんが・・・?」

大石が羽入に疑問を持つが・・・

「実は彼女、少し込み入った事情で戸籍がないんですよ。」

「おや、何か身内のトラブルですか?」

「はい・・・。俺もついさつき聞いたばっか何で知らないんですが・・・何とかできませんか?」

永司の言葉を聞き大石は考え込む。そしてうなりながらも答えた。

「分かりました。あとでいくつか質問しますが何とかしましょう。・・・ところであなたは?」

「あ、俺は神童永司。一応旅人です。」

「アंकだ。」

「二人とも、僕の助けになってくれるのです。」

それから互いの自己紹介を済ませた後本題に入る。

「皆さんにもお話しした通り雛見沢症候群は過度なストレスによる発症が予測される中で最も確率が高いです。」

入江が雛見沢症候群についての話に入った。

「つまりは……前原さんに竜宮さん、北条さんにあとは園崎さん姉妹。複雑な家庭事情を持つ彼らが要注意ですね。」

大石が腕を組みながら告げる。その言葉は確かに的を得ていた。

「みんなには俺やアंक、梨花ちゃんと羽入ちゃんで何とかします。俺はしばらく分校の手伝いをしようと思いますしアंकは適当な場所を監視してくれますし。」

「分かりました。富竹さんと私と大石さんはそれぞれで情報を集めましょう。入江さんは感づかれないよう山狗と鷹野三四との接触をお願いします。」

赤坂が最後に残った人物の役割を告げる。

「分かりました。尽力しましょう。」

そしてその場はそれで解散となった。

「あ、俺パンツ持ってない……お金も着替えも……。」

という訳で明日、富竹がお金を支給してくれることになり永司たち

は富竹と共に興宮のホテルに向かった。

.....

count・the・medal!!現在、オーズが使えるメダルは.....

タカ×2 トラ×2 バツタ カマキリ チーター ライオン×2
クワガタ ゴリラ

.....

.....翌日.....

「おはよう永司くん。昨日はよく眠れたかい？」

「おかげさまで。アंकは？」

富竹は目を覚ました永司に話しかける。永司は笑顔で返すとこの場
にいないアंकの事を尋ねた。

「アंक君なら調べものでもう出発したよ。君も雛見沢に行ったら
どうだい？」

「わかりました。富竹さん、くれぐれも気をつけて下さいね。」

「わかってるよ。」

永司は富竹の泊まっていた部屋を出発した。ポケットから携帯ベン

ダーを取り出しスイッチを押す。ライドベンダーに変化した携帯ベンダーにセルメダルを投入しバイクモードに変形させた永司は雛見沢に向かって走っていた。

・・・雛見沢分校・・・

まだ朝早い時間のため生徒たちは1人もいない。今いるのはこの分校にいるただ1人の教師、知恵 留美子だけだ。

「今日のカレーは野菜たっぷり野菜カレー 人参、ジャガイモ、タマネギ、ブロッコリー」

ちなみにハイパーを超越したマスターカレー狂でもある。そんな彼女にライドベンダーに乗った永司が近づいてくる。

「あら？アナタは？」

「神童永司って言います。実はしばらくこの雛見沢に滞在しようと思っんですけど、この分校に先生が1人しかいないって聞いてきました。で、何かお手伝いできたらいいなと思って・・・」

知恵はしばらく考え込んだが一向に答えを返せない。そんな時、この学校の校長である海江田が現れ笑いながら話しかけてきた。

「いいじゃないですか知恵先生。」

「校長先生・・・！！」

「とても強い目をしている子です。・・・そう、悲しさもむなしさも経験してきた目をね・・・。」

「・・・・・・・・」

こうして永司は分校を手伝うことが正式決定した。・・・・・・・・なお、この後永司が誤って海江田校長の頭に触れてしまい永司VS海江田の激闘が繰り広げられたのは余談である。

第1話 始まりの000 (後書き)

質問と感想待ってます!!

第2話 新しい世界(前書き)

質問や感想待ってますよ!!

第2話 新しい世界

・・・雛見沢分校 教室・・・

「起立！礼！！」

「」「おはようございます！！」「」

「着席！」

今日もまた委員長である園崎魅音の号令から1日が始まるうとしていた。ただいつもと違うことは・・・

「今日から新しく入学してきたお友達とみんなに勉強を教えてくださいる先生を紹介します。」

知恵先生が教壇で皆に発表する。

「ふ・・・古手羽入なのです。よ、よりよくおふえがいしりやすなのです！！」

羽入が自己紹介をするが緊張のあまりかみかみな自己紹介になった。

「わっ！！」

「可愛いなっ！！」

しかしながらクラスでの印象は一気に上昇した。

「へ〜、梨花ちゃんと同じ名字だ!！」

この感嘆とされている茶髪の少年が前原圭一。惨劇を打ち破るのに中心的役割を担う人物。

「梨花ちゃんの親戚か何かかな?かな?」

この語尾を繰り返す独特な話し方をする少女が竜宮レナ。

「私は今朝、梨花から話されましたがさすがに驚きましたわ。」

黄色い髪の少女が北条沙都子である。

「み〜、僕の遠縁なのですよ。」

「最近、家庭事情で梨花ちゃんたちと暮らすんだって。」

梨花が羽入の事を偽りながら話し魅音が自分の知る情報を話す。

「次は新しい先生ですわね。どのトラップでお出迎えいたしましよ
う?」

沙都子が自慢のトラップで新しい先生をお出迎えようとする。しかし梨花が笑いながら、

「今回ばかりは沙都子のトラップも通じないのですよ。にば〜。」

「む、試してみないとわかりませんことよ!！」

最終警告とも取れる発言をする。しかし沙都子はプライドに火がつ

きドアが開く瞬間にトラップを作動させる。今回はチョークミサイ
ルだ。

「うわ!？」

入ってきた青年・・・永司はチョークミサイルを前転で回避する。

「なかなかやりますわね。次は、」

お次は水入りバケツが何処からともなく落ちてきた。しかし永司は
そのバケツを・・・

「おっと!？」

すかさずキャッチ。しかも空中に浮かんだ水をご丁寧**に**バケツで受
け止めた。

「な・・・!?!最後はこれですわ!!！」

最終トラップはなんと天井に張ってあった板が落ちてきた。永司の
手にはバケツ。万策尽きたかった思ったそのとき、

「せいやっ!!！」

永司は空中にバケツを投げる。そしてその場で空中一回転し板を蹴
り飛ばしバケツをキャッチした。・・・水は一滴もこぼれ落ちてい
ない。

「だ、大丈夫ですか!？」

「あ、水はこぼれてませんし板もほら。」

永司は天井を指差してみる。そこには外れたはずの板が再度同じ所に綺麗にはまっていた。

「いや、教室じゃなくて・・・」

「楽しかったしいいですよ。」

その光景を見ていたクラスの面々、特に小さい男子や女子は目を輝かせていた。

「ㅋㅋㅋかつ・・・カツコイい!!」「」「」

そして部活メンバー（梨花を除く）は相当の衝撃だった。

「はうう、凄いね!!」

「わ・・・私のトラップがいとも簡単に・・・」

「いやう、あれにはおじさんもビックリだわ・・・。。。」

「スゲー!!俺、対処の仕方教えてもらおう!!」

まあ永司は仮面ライダーオーズとして戦っているだけあって感が鋭い。あれは永司だからこそできた芸当だろう。

「じゃ、改めて。神童永司です。よろしく!!」

そうして朝のホームルームが終わった。

・・・1時間目 LHR・・・

そして1時間目は羽入と永司への質問タイム。クラスの皆がどんどん二人に質問を投げかける。

「永司さんって先生なんですか？」

「うーん・・・本職は旅人かな？しばらくは此処にいるけどね。」

「羽入ちゃんは梨花ちゃんの所で暮らすんですか？」

「たぶん、そうなると思いますのです。」

そしていよいよ部活メンバーが質問に来た。

「永司さん、沙都子のトラップの対処法の伝授を！！」

圭一、まだそれを言うか。永司は笑いながらアドバイス。

「そうだね・・・まずは常に心に余裕をもって行動することかな？無理に冷静になろうとせず自然体でいたら見えなかったものが見えると思うよ。」

「あ、ありがとうございます！！」

次に来たのはレナだ。

「永司先生は旅人って言うてましたけど、具体的には何処に行った

永司はレナパンを受け止めた。……これまで一度もレナパンを見たことがない永司が。部活メンバーは全員驚きを隠せない。

「はう！はう！はう！はう！はう！はう！はう！はう！」

「やっと！わっ！？せいやっ！！」

永司は次々と繰り出されるレナパンを受け止めるあるいは弾いて一発も喰らわないようにする。そして……

「はあああ！！」

永司がレナの首筋に手刀を撃ち込みこの戦いは終止符を打たれた。そして圭一は静かに一言。

「……スゲエ。」

……放課後 部活タイム……

「よーし！今日も部活を始めるよ！」

魅音の号令で部活メンバーが集まる。今日もいつも通り部活が始まる。そしてその時、

「ちょっといいかな皆？」

永司が羽入を伴って近づいてきた。

「あれ、永司さん？どうしたんですか？」

圭一が声を上げ尋ねる。永司は肩を叩きながら羽入を励ます。

「僕も……部活に入れてくれませんか？」

羽入は意を決したように言う。永司はそれを見て笑みを浮かべる。

「良く言えたよ!!」

「ほっほ、こりゃ驚いたね。まさか我が部に自分から入部を希望するなんて。」

「ついでに俺も参加するよ。」

「え!？」

魅音は素っ頓狂な声を上げる。それはそつだ。羽入はともかく永司は先生だ。

「一応、部活に顧問は付き物でしょ？」

「いいじゃねえか魅音、新しい仲間が増えるんだ。」

「うーん……よし、では羽入の入部試験と永司さんの実力拝見ということで今回の部活は……」

魅音はトランプを取り出しながら高らかに宣言する。

「ジジ抜きに決定だ!!」

「あ、トランプは俺がシャッフルするね。」

永司は箱からトランプの束を取り出すと手早くシャッフルしジジを抜いた後、皆に配分。そしていらぬ札を抜き終えたところで部活がスタートした。

・・・数分後・・・

「あ、あれ!？」

「ま、間違えましたわ!？」

部活メンバーはいつもトランプをするとき、ワザと傷だらけのトランプを使う。裏についた傷で札を判別できるからだ。しかし今日は一向に札が当たらないのである。

「ふふふふふふ・・・。」

「ま、まさか永司さん!？」

静かに笑いをこぼした永司を見て魅音は悟った。

「トランプに少し細工をしたよ。傷を増やすって細工をね。シャッフルの時ワザと傷がつくようにしてきつたからね。はい、これで1抜け!！」

恐るべし永司。部活メンバーが苦戦する中、いとも簡単に一位になつてしまった。そして皆も傷を認識し始めたのか・・・

「み〜あがりなのです。」

「おーほっほっほ!!! 私もあがりですわ!!!」

「はう。レナもあがれたよ!!!」

「おーっし、あがりだ!!!」

梨花、沙都子、レナ、圭一が抜けて行った。残ったのは……

「あつあつあつあつあつ……」

「ぐ……おじさんは負けないよ!!!」

魅音と羽入だ。

「あ、羽入ちゃん右の札取りなよ。あがりだよ。」

「ちよっ!?!」

魅音は面食らってる間に羽入はすかさず札を取る。

「あつー!!! あがりなのですよ!!!」

「あ————!!!」

そして罰ゲームは魅音に決まった。内容を決める永司は……

「……ゴメン、思いつかないから圭一君に……」

「任せてください!!! とびっきりの萌えを……」

「やっぱり2位の梨花ちゃんです。」

圭一に委任しようとしたが嫌な予感がしたので梨花に委任した。

「じゃあ……………」

……………下校中……………

「うわー………スクール水着に猫耳としっぽって……………
………魅音ちゃんゴメン。」

まさか圭一と同じような罰ゲームになるとは永司は予想してなかった。ゆえに謝る。

「……………おおおおお梨花ちゃんナイスだ!!!!」

「……………」

圭一は……………否、今はソウルブラザーズのKは大声で叫びを上げる。さすがにうるさいのは近所迷惑なので沙都子が自慢のトラップで黙らせた。

「……………ところで、永司さんは何処で暮らしているんですか?」

何気なく聞いたレナだったが永司は顔を青ざめ……………

「……………ゴメン、ない。野宿。」

とだけ言った。

「「「「「「「「「「「「「」

皆が黙り込んでしまった。そしてそれぞれ家に帰り永司は梨花と沙都子と羽入を送るついでに古手神社へ向かった。

・・・古手神社・・・

既にアंकがここに来ていた。そして永司に少し遅れて大石と赤坂が到着。その後、入江と富竹が現れ最後に羽入と梨花が来て全員そろった。

「まずは俺が報告する。園崎詩音は今のところ普通だ。だが、竜宮レナの父親が美人局にあつてる。北条鉄平が雛見沢に現れるのは時間の問題だ。」

アंकが興宮を偵察した結果を述べる。

「それはまずいですね・・・・・・・・このままだと沙都子ちゃん、竜宮さん、詩音さんが症候群を発症してしまいます・・・・・・・・。」

入江が率直な感想を言い放つ。

「大石さん、何とかできませんか？」

「難しいですね・・・・・・・・現行犯ならともかくこういう場合は確実な証拠がいりません。今は状況を見てチャンスを待つしかありません。」

「そうですね・・・・・・・・。」

富竹の問いに関して大石が答える。この事は保留にしておくことにした。

「次は私が。鷹野さんや小此木さんと話してみましたが・・・やはり終末作戦を行うような気配が漂っていました。綿流しまでに計画を立てないと。」

「僕の方でも知人に調査をお願いした所、鷹野三四に不正な金が送られていたりと極秘裏に工作がされています。」

入江と富竹が報告する。大石と赤坂の方も大体見知った情報しか入ってこなかった。

「・・・やっぱり、皆と協力する必要がありますね。」

永司がふとつぶやく。

「皆って・・・まさか前原君たちかい!？」

赤坂が反応し永司はうなづく。

「みんなは確かに惨劇の引き金かもしれませんがそれと同時に強い意志を持っています。彼らほど味方にして心強いメンバーはいないと俺は思います。」

「しかし・・・危険が大き過ぎますよ神童さん!!」

入江が反論してくるが永司はそれを知っていたかのように話す。

「でも、鷹野さんたちを止めないと遅かれ早かれみんな死ぬんです。」

行くのも地獄、引いたとしても地獄なら進みましょうよ!!」

永司は強い意志を持ち、そう話した。

「……分りました。しかし、彼らからの信用を受けなければだめですね。」

大石は納得するがそれに呼応して問題点も発覚する。

「そこは俺とアंकと梨花ちゃんで何とかします。……今日はこれまでにしましょう。あまり長く集まってるって怪しまれます。」

そして皆は解散。永司は静かにぶらぶらしながら夜を明かした。

第2話 新しい世界（後書き）

次回はいよいよあいつらが動き始めます・・・。

第3話 灰色のメダル（前書き）

今回は短めです。

第3話 灰色のメダル

・・・祭具殿・・・

「・・・確かこのあたりにしまってたはずなのです・・・」

羽入が祭具殿に入り（入る時に幽体化。入ってから実体化）あるものを探していた。

「永司たちが来たときに気づいておくべきだったのです。・・・この世界にも？コアメダル？があつたことに。」

羽入は祭具殿の道具を調べに調べる。そして・・・円状の装飾箱を見つけるとそれを開く。中にはグレー系色に彩られたメダルが？10枚？あつた。

「あつたのです・・・！！これ・・・を・・・!?」

それを見て祭具殿を出ようとした羽入。メダルごと幽体化し無事に外に出ることができたのだが地面に落ちてた小枝に引っかかり盛大にこける。・・・その拍子に、箱から飛び出したメダルが飛び散ってしまった。

「あ・・・あうあうあうあう!!」

羽入は近くに落ちていた2枚を拾い上げる。が、残った8枚のメダルはどこかに行ってしまった。

「2枚しかないのです・・・。あうー・・・」

羽入はしばらくの間探し回ったが見つからなかったので諦めて家に帰る。・・・近くの茂みで8枚のコアを中心にアリヤミーが爆散した時にアंकが回収し損ねたセルが集まり？何か？が生まれつつあることに気付かずに・・・。

・・・翌日 興宮市内ホテル・・・

「毎回すいません富竹さん。何から何まで・・・。」

「いや、気にしないでいいよ。僕も一人で泊まってるのより楽しいしね。」

相変わらず富竹にお世話になってるオーズ組。富竹自体は気にしてないのでいいのだが。

「じゃあ僕は野鳥撮影に行ってから調査を進めるよ。君も分校に向かうだろう？」

「はい。アंकはどうするの？」

「俺はまだ興宮で調査しようと思う。その後、雛見沢に向かう。」
そうして本日も下準備が始まった。

・・・雛見沢分校・・・

「・・・ここにはこの公式を当てはめるんだ。で、それから内の数字を割って・・・。」

「????」

「レナ、ここで外してあった?を使うんだ。」

「成程……。」

知恵先生が小学部を見ているので永司が圭一と共同でレナと魅音を見ていた。圭一は元々進学コースに通っていたため、永司は元々いい生まれであったことと外国でも通用するよう必死に勉強した結果、東大クラスの学力を持っているため魅音たちに勉強を教えていたのだ。

「しかし、永司さんってホントに完璧だよな。」

「うんうん、レナもそう思うよ!!」

「俺もだぜ。運動も勉強も非の打ちどころがないし。」

「……俺は完璧なんかじゃない。……目の前で大切なものすら守れなかった弱い人間だよ……。」

そういう永司の目は暗く……まるで何かに取り付かれたような目だった。

「……あ……」

3人はまずい話題だったと思い後悔する。しかし永司はすぐに微笑みながら……

「君たちが気にすることじゃないよ。さて、続きやろ!!」

とだけ言った。

・・・部活時間・・・

「本日の部活は・・・」

「おい永司!!」

魅音が部活を宣言しようとした瞬間、アंकが窓を開け顔を出してきた。

「うわああ!?!何!?!」

高らかに宣言しようとした机に乗り上げていた魅音は勢い余って地面に転落してしまった。

「あ、アंक!?!どうしたの?」

突如、慌てた表情で現れたアंकに永司が訪ね寄る。アंकは静かに一言を呟いた。

「・・・グリードの気配だ・・・」

グリード・・・本来ならこの世界に存在しないもの・・・しかしアंकは確かに呟いた。

「ど・・・どういうこと!?!」

「え、永司さん!?!」

圭一は焦りを見せる永司に不安を覚える。事情を知る梨花が魅音に部活の中止を求め、許可を取った後永司と梨花、羽入とアंकは走って行った。

「どうしたんだろ・・・だろ？」

「うーん・・・今更追いかけても仕方ないしなあ・・・」

残ったメンバーは皆、疑問を浮かべていた。

「あら？圭一さんは？」

そして、沙都子が圭一がいないことに気付いた。

「嘘!？」

「まさか・・・永司さんたちに!？」

・・・裏山・・・

「どづゆづことなのですか永司!？」

梨花が不安な表情で永司に疑問を投げかけた。

「初めから予想はしていたんだ・・・オーズが呼び出されるにはオーズが必要な事態・・・つまりこの世界にグリードが居るんじゃない・・・て!!！」

永司たちは走りながら会話していた。その話を聞いて羽入は顔を青ざめながら謝罪する。

「あうあうあう、実は昨日祭具殿にコアメダルがあつたのを渡そうとしたのです・・・でも八枚落としてなくしたのですよ。」

「この馬鹿！役立たず！トラブルメーカー！！」

梨花は羽入に罵声を浴びせる。羽入は申しわけなさそうにグレー色をしたメダルを二枚取り出した。それを見たアंकは驚きの表情を見せた。

「おい、それ渡せ！」

「あ、あう！！」

羽入はメダルをアंकに投げる。アंकはメダルを確認すると舌打ちして話し始める。

「チツ！やっぱり・・・ゼツのメダルだ！！」

「ゼツ・・・？アंक、それグリード？」

「ああ・・・800年前、メダルは大量に作られたが成功した俺たちのメダルを除いて他は失敗作として廃棄されたんだ。その中でも2種類だけ廃棄される理由が違うメダルがあつた。」

「それで・・・？」

「共通する理由はどっちも危険だったからだ。甲殻類系のメダルはグリードを生み出す事は無理だったがメダルの力が強すぎた。そして今手元にある犬系メダルはグリードを生み出したが……そのグリード、ゼツは性格が歪んでな……」

「……800年前の「オーズの世界」 ????」

帯びたただしい量の血がぶちまけられている神殿のような建物……。周りには老若男女を問わず無数の屍が存在する。その中央に一人の若い青年とジャツカルのようなスマートな頭部、狼の足のような鋭い爪が存在する腕、妖怪としても語られる狐のようなしっぽに足を持つ異形の存在が立っていた。青年の腰には永司と同じオーズドライバーが装着され、すでに三枚のメダルが装填されていた。

「ゼツ……これ以上むやみに人を殺すのなら、俺はお前を倒す……!」

青年は怒りと哀しみが入り混じったような表情で叫ぶ。

「やってみなよオーズ……俺もお前の血を見てみたかったところだ……!」

「く……変身……!」

?タカ……トラ……バツタ……タ・ト・バ……タトバ、タ・ト・バ……!?!?

青年はオーズに変身。そのまま異形の存在……グリード、ゼツと激突する。

「はあああああ！！！！」

「ヒヤッハーハー！！！！！」

オーズの拳とゼツの拳が激突する。そしてその神殿は大爆発を起こした……。

……「ひぐらしの世界」 山道……

「虐殺の限りを尽くしたゼツは先代オーズが倒し、そのメダルは欠けた一枚を足した10枚にして封印されたはずだった。」

「そうか、10枚組なら欲望は満たされてグリードは生まれえない！」

「だがここに2枚あるってことはあと8枚とおそらく俺達が倒したヤミーの残りメダルでゼツは復活しただろうな。」

只でさえ永司たちの世界のグリードの誰かがこの世界にいるのにさらに封印された第5のグリードまでもが復活……この世界の暗雲は一層、深くなってしまった。

「とにかく、急いで向かわないと！！ここまで来たら道も整ってるし、ベンダーで……！」

「分かった。」

永司とアंकはそれぞれ携帯ベンダーをライドベンダーに変形させ永司の所に梨花、アंकに羽入が乗りその反応がする場所へと走って行った。

~~~~現在のオーズの所持メダル~~~~

タカ×2 トラ×2 バッタ カマキリ チーター ライオン×2  
クワガタ ゴリラ オオカミ キツネ

第3話 灰色のメダル（後書き）

感想待ってます!!



第4話 前原圭一〜獅子の如き熱い心〜 (前書き)

今回はオリジナルメダルでの亜種形態登場!!

#### 第4話 前原圭一と獅子の如き熱い心

永司たちは森の奥にあるダム工事現場……今はレナが宝探しをするゴミ山に来ていた。

「アंकクココ？」

「ああ、間違いない……。出てこいよ、カザリー！」

アंकクは声を荒げ叫ぶ。それに呼応するかのようにゴミ山の頂上からカザリが姿を現した。

「やあ……。君たちもこの世界に来たんだ。ここならゆっくりメダルを稼げると思ったのに……。」

「あいにくと、管理者はそう簡単な奴らじゃないんでなあー！」

対峙するアंकクとカザリ。永司はこのままでは危ないと思い梨花と羽入の前にたちドライバーを装着する。

「アंकク、念のため変身するよー！」

永司はメダルを取り出すとオーズに変身しようとする。が……

「ふふ……。今だよー！」

「はあー！」

「うおおおおー！」

「な!?!」

永司の左右から海の生き物を模したグリードと重量動物を模したグリードが永司を襲撃。その際にトラとバッタのメダルを弾き飛ばされてしまう。

「永司!?!」

「っ!?!」

梨花の声で永司の方向を向くアंक。しかしその隙を狙い……

「はああああ!?!」

「な、しまっ……ぐああ!?!」

ウヴァが奇襲。アंकの腕からセルとライオン2枚、ゴリラのメダルが飛び出してしまふ。グリードたちはそれぞれがメダルを回収するとカザリのいる場所に集まる。

「っ……」

「あうあう、永司しっかりするのですよー!?!」

「あぐ……」

「アंक、大丈夫ですか!?!」

永司は蹲り痛みにも耐える。アंकは腕を押さえながらカザリたちを

睨む。

「よおアंक、俺のメダルを返してもらおうか？」

「ウヴァ・・・だと！？それに・・・！！！」

「お久しぶりねアंक。・・・やっぱりオースのもとに行くのね。」

「あंकー！ーおれのめだるかえせー！！！」

「メズール、ガメル！！！」

グリードが一堂に集まっている。こんなことは滅多にないだろう。

「ぐ・・・」

永司はゆっくりと顔を上げウヴァたちのほつを見る。

「グリードが・・・4人!？」

「っ・・・そんな・・・」

「嘘・・・」

「なんで・・・だ・・・？」

しかしウヴァたち3人は永司の顔を見た瞬間、驚きのあまり言葉を失っている。

「チャンスだな・・・ふ!!」

アंकはその隙に腕を飛ばしガメルが持っていたバツタのメダルを奪還する。

「しまった!？」

カザリがアंकに爪を振り下ろすがアंकはそれをよけ新吾の体に戻る。

「どうゆうことだカザリ!!なんで?エイジス?がいるんだ!？」

「ウヴァ落ち着いて。ただ似すぎてる別人だ。」

一方のグリードたちは何やら言い争っている様子だった。

「永司!!変身だ!!」

「待ってアंक!!エイジスって誰!？」

「その話はまた今度聞かせてやるとにかく変身・・・」

アंकが変身させようと促しているときに木が折れる音がしそこにいた皆が振り向いた。

「・・・・・・・・」

そこにいたのは圭一だった。

「圭一君!？」

「ち！！厄介な時に厄介なことが・・・！！」

圭一は・・・疑心暗鬼の目をしながら周りを見つめる。

「なん・・・だよ・・・お前らみんななんなんだよ！！」

カザリはそんな圭一を見ながら・・・笑みをこぼす。

「面白い欲望だね。みんなを信じたいのに信じられない・・・そんな気持ちが欲望になってる。」

カザリは圭一に向かってセルメダルを投げつける。セルメダルはまっすぐに圭一の方角に向かっていき・・・

「！！！」

圭一の額に吸い込まれていった。

「う・・・うわああああ！！！！！！」

「圭一！？」

「だめだ梨花ちゃん！！」

永司は圭一のほうに向かおうとする梨花を制止する。そして圭一はライオンとトラ、二つの特徴を持つ姿・・・ライガーヤミーに変化してしまう。

「そ・・・そんな・・・」

羽入は圭一がヤミーに変化したことにショックを受けその場に座り込んでしまう。

「面白いことになったみたいだね。」

「カザリ、てめえ!!！」

アंकは嘲笑うカザリを怒りの表情で見上げる。

「さて……今日は顔みせもできたことだし、メダルも取り返せました……帰るとしようかな。」

「ち……アंक覚えてろ!!！」

「……………」

「うう……まってみんな……!!！」

カザリはなおも愉快そうに、ウヴァはアंकに対して怒りを覚えながら、メズールは何も言わずただ悲しさを見せながら、ガメルは歩いて行かれるのが嫌でみんなについて行きながらその場を離れた。

「……………永司!!！」

「わかってる……何とかしないと。変身!!！」

？タカ!!！トラ!!！バッタ!!！タ・ト・バ!!！タトバ、タ・ト・バ!!！!!？

永司はアंकから受け取ったバツタとトラ、そして自身が所有していたタカをドライバーに装填しオーズに変身する。オーズは変身と同時にトラクローを展開。ライガーヤミーに向かって走り出す。

「永司！！やめるのです、それは圭一なのですよ！？」

「…………カザリのヤミーは親を取り込む。倒すには取り込んだ親と分離させてからしかできない。それは永司もわかってる。あいつに任せる。」

「あ…………あう…………。」

梨花と羽入はアंकに論されオーズとライガーヤミーの戦いを見つめていた。

……………  
……………  
……………

「グラアアアア！！！」

ライガーヤミーは素早い動きでオーズを翻弄。そして強靱な腕でオーズを殴り飛ばす。

「ぐあああ！？く……………」

オーズはトラクローでそれをガードするがその威力は凄まじくガードしたのに数m吹き飛ばされた。オーズは立ち上がりタカの能力でもある強化視覚能力を使い圭一的位置を探る。



「……………見つけた、アंक。チーターのメダル!!」

オーズはアंकにチーターを要求するが……

「こんな足場が悪いところでチーターは意味がない!!あれは平地で真価が発揮される!!」

「そんな……!!」

そう。チーターの高速移動は足場が整っている場所でこそその力を100%発揮できる。しかしここはゴミ山。周りに障害物も多く足場も悪いためチーターレッグではその速さを活かせない。

「ガウ!!」

「だあ!?!」

そして油断していたオーズは背中に強烈な一撃を見舞われる。その衝撃でオーズはゴミ山に衝突。追加ダメージを受けてしまう。

「がふっ……………」

オーズは火花を散らしながらも何とか踏みとどまった。

「永司!!」

「くそ……………何か手は……………」

梨花が永司を心配する声を上げアंकはこの状況を打開できないか考える。そしてアंकは自信が取り込まずとポケットにしま

っていたメダルを取り出した。

「こいつらなら・・・永司!!」

アंकはオオカミとキツネのメダルをオーズに向かって放り投げた。

「あ・・・と・・・。」

オーズはそのメダルをキャッチするとドライバーからトラとバツタを抜きオオカミとキツネを代わりに装填する。

「気をつける永司!! そのメダルは800年前にも使われたことがない!! 何が起こるか俺も予想できないぞ!!」

「それ今言う!?! ああもう・・・変身!!」

この土壇場で衝撃のカミングアウト。しかし文句を言っていたられるような状況でもないため永司は覚悟を決めメダルをスキャナーでスキャンしていく。

?タカ!! オオカミ!! キツネ!!?

トラクローはライトグレーを基調とする腕に牙の付いたバングルのようなものがあるオオカミアームに、バツタレッグはダークグレーを基調とするキツネレッグに変化する。ただどちらも共通しているのはその基本色とどこどこに存在する毛皮の存在により今までのオーズよりも生物的な印象を受ける姿だった。新たなメダルを使用した新たな亜種形態・・・タカオオツネ。

「は・・・はああああ!!」

キツネレッグに力が届くとともにオーズは全力疾走。チーターには劣るもののそれに次ぐ高速移動を見せる。しかもその悪路にまつた影響していない。山のような足場が悪い場所でも活動し、個体によつては馬とも並ぶほどの速さを出せるキツネの力は永司の想像以上だった。

「よし……せいやああ!!」

「ガア!？」

オーズはゴミ山の斜面に上るとそのまま急斜面を駆け抜け方向転換腕のバングルに力を送り、オオカミの牙がついたようなメリケンサック……オオカミナツクルを展開する。

「はあ!!」

「ゲゴ……!？」

オーズはオオカミナツクルをライガーヤミーに突出しそのまま貫通させる。そしてオーズは中にいる圭一呼ぶ。

「圭一君!!」

……???

誰かが……俺の名前を呼んでる……なぜだろう……永司さんや梨花ちゃんたちが変な奴らと話してるのを見て……頭がパニックになってたのに今は普通に考えられる……。そういえばこんなこと前にもあったな……。そうだ……。俺は・

・・・難見沢症候群になつて魅音やレナを殺して・・・そうか・・・  
・・・あの時・・・鷹野さんたちと戦つて負けて・・・それでも  
あきらめなかつた・・・だから俺はこうしてここにいるんだ・・・  
！！俺はゆっくり目を開ける。そこには永司さんの・・・今は  
永司さんじゃないけど確かに永司さんの手がそこにあつた・・・。  
俺はその手を・・・と、武器がついてないところを握る・・・  
。さあ、今度こそ・・・俺は・・・！！  
・・・ダム工事現場・・・

「うおおおお！！」

オーズは手に誰かが掴まる感触を感じると勢いよく引つ張り、ライ  
ガーヤミーから圭一を助け出す。

「圭一！！」

「梨花ちゃん・・・ごめん！」

圭一は梨花たちに謝る。オーズはそれを見つめるとメダジャリバー  
を取り出しセルメダルを装填。オースキャナーでスキャンする。

？トリプル、スキャニングチャージ！！？

「せいやあああ！！」

「ガ・・・フ・・・」

オーズはオーズバツシュでライガーヤミーを一刀両断。ライガーヤ  
ミーは爆散しセルメダルだけが辺りに残つた。

「永司。」

「アंक・・・・俺、圭一君がつかんだ時にわかったよ・・・・。やっぱりこの世界はまだ手が届く世界だって・・・・。」

オーズは圭一たちを見ながら変身を解除。そして強い決意を秘め、アंकに話していた。

~~~~~現在のオーズの所持メダル~~~~~

タカ×2 トラ バッタ カマキリ チーター クワガタ オオカ
ミ キツネ

第4話 前原圭一〜獅子の如き熱い心〜 (後書き)

感想待つてマース!

第5話 ゲーム大会（前書き）

今回は戦闘シーンがありません。

第5話 ゲーム大会

圭一を救い出した翌日。前原宅。

「すみません。いきなり居候なんて……。」

「いえいえ。圭一が大変お世話になっているようで。」

「そうですね。何より賑やかなのは楽しいですからね。」

永司はあれから圭一の家にお世話になることになった。ちなみにアंकも一緒なのだがアंकは現在梨花たちと行動中なのでこの場にはいない。ゼツのことについて古手の祭具殿に向かっているようだった。そして日曜日、伊知郎と藍子と永司は朝食を共にしていた。

「今日はこの後、圭一とお出かけでしょ？なら、これを持って行ってください。」

藍子はリュックサックを取り出した。

「これは？」

「あの子、変なところで忘れっぽいから念のためを思っって用意したんです。」

「それにしばらく僕たちは仕事で東京に行ってきますから……永司さんが来てくれて助かってます。」

永司はリュックを受け取ると朝食を食べ終え圭一の部屋に向かう。

「おーい、圭一君？もう、8時20分すぎたよ？部活のゲーム大会遅れるよ？」

「へ……………？」

圭一は眠そうな目をこすって時計を見る。そして、目をぱちくりさせながら飛び起きた。

「どわあああああ！?!?やべええええ！？」

圭一は急いで着替えると鍵を持ってそのまま飛び出してしまった。

「あ、ちょっと……………はあく藍子さんの言うとおりだなあ……………」

永司は圭一のかばんも持ちながら携帯ライドベンダー起動。バイクモードで圭一を追いかけた。というか追い抜かしていた。

「永司さーーん!?!？」

「ごめん、先にいくよーーー！。」

……………興宮市内 おもちや屋……………

「遅いね圭一君。」

「永司さんが一緒だから大丈夫だと思っけど……………」

部活メンバーは圭一と永司を除き全員集まっていた。

「梨花・・・・・・・・」

「ええ。この展開はよくあるパターンだからわかるわ。アंकが言っていたことが本当なら・・・・・・・・なおさらね。」

・・・昨日 ライガーヤミーとの戦闘後・・・

「圭一、記憶があるのですか!？」

「ああ・・・・・・・・最近薄らばんやりだったのに、あの怪物に取り込まれてからはつきりと思いついたんだ。それに、軽い疑心暗鬼だったのも永司さん・・・・・・・・オーズだったっけ?その手をつかんだ瞬間それも消えたんだ。」

「オーズに触れた瞬間疑心暗鬼が消えた?」

梨花が疑問の表情と素振りを見せる。そこに独自でグリードたちを追跡していたアंकが戻ってきた。

「成程な。それはおそらくコアメダルの影響だろうな。」

「コアメダルの?」

永司がアंकに問いかける。

「知つてのとおり、オーズが使うコアメダルはもともと欲望から生まれた存在だ。だから、使い方次第では欲を減らすこともあれば欲を増幅させることもある。今回、圭一の持ってた欲望のうち仲間を信じられないほうが減衰し仲間を信じる欲が増幅した結果、離見沢

症候群を超えたんだろうな。」

アंकは自信の持っているメダルを確認しながらそうつぶやく。

「ち、ラトラーターは使えんか。まあ……あっちのコンボを使えば何とかなるだろうがな。」

「……あ、そうだ。圭一君、記憶が戻ったから多分わかるだろうけど……。」

「鷹野さんの戦いですよね。もちろん協力します!!!」

「よかった……!!」

その場にいた面々に自然と笑みがこぼれた。しかし永司は真剣な表情をして口を開く。

「でも……オーズの影響で記憶が戻ることが分かったけど良いことだけじゃないんだよね……。」

「ああ……落ち着いて聞いてくれよ?」

アंकの言葉に3人は静かにうなづく。それを確認したアंकはそのよくないことを話し始めた。

「グリードが現れただけなら俺たちで対処すればいい話なんだが今回の世界は今まで経験した世界のうち、仲間が疑心暗鬼にとらわれて惨劇を引き起こす可能性が高い世界だ。その疑心暗鬼は強い欲望に結びつき、強力なヤミーが誕生するだろう。」

「でも、俺の奴はそんなに強くなかったと思うんですけど……」

圭一が自分の思うことを口に出してみる。

「たぶん、圭一君は薄らぼんやりとだけ記憶が残ってたからだと思う。だから、二つの欲望で混合ヤミーが生まれたけど強さは抑えられたんだと……。」

「たぶんその仮説であってるな。ともかく、この世界は今までよりもいっそうすごい世界だということのを頭に叩き込んでおけ。」

そして話は終わった。

……興宮……

「ぜえ……ぜえ……」

「あと少しだよ圭一君!!」

今にも息切れしてしまいそうな自転車を漕ぐ圭一とライドベンダーで少し前を行き声をかける永司が興宮に入ってきた。永司はタカカンドロイドを三体圭一の後ろに起動しており圭一が止まりそうになるたびにカンドロイドで背中をつつかせ走らせていた。正直つらくもある程度の休憩が与えられるスパルタ練習より遙かに過酷な状態だ。しかも永司、タカカンドロイド以外にもタコカンドロイドやウナギカンドロイドを起動しようとしている。

「うーん、あと4体追加かな？」

「いや、頑張りますから！！だからやめてください!？」

圭一は最後の力を發揮し全力疾走。それを見た永司は微笑みながら・・・ライドベンダーを圭一の自転車の後ろに移動させる。・・・ウルトラマンレオのジープのごとく。

「!？」

「早くいかないと衝突するよ？」

「ぎゃあああああ!？」

この時の永司は・・・悪魔や混沌に近い存在だった・・・。

・・・興宮市内 おもちや屋・・・

「魅音ちゃん、そろそろ時間が来るけど・・・。」

「善朗おじさん。じゃあ準備してください。」

既にあと残り5分を切っていた。しかし・・・。

「うおおおおおおお!!!!!!」

「フアイト」

今にも死にそうな圭一とすこぶる笑顔の永司がそんなタイミングで到着した。圭一は既に目が死んでしまっている。

「け、圭一君!？」

「圭ちゃん!？」

魅音とレナが慌てて圭一に駆け寄る。それを永司は冷たさ混じる微笑みで見つめていた。それを遠くから見ているアंकは……

「……………混沌の神かアイツは？」

永司をこう表していた。そして参加者が全員来たのでゲーム大会が開催された。今回行われる内容は……………2ブロックに分かれてのトランプスピード対決だ。ちなみにブロックで部活メンバーは分かれてしまい…………

Aブロック 圭一 沙都子

Bブロック 梨花 レナ 魅音

不参加 羽入（参加用紙を忘れた） 永司（そもそも参加資格年齢が最大15歳）

となった。ちなみに永司は泣きかけの羽入を慰めている。

「あうあうあうあうあう（泣）」

「まあ……………元気出して？ほら、後でシュークリーム買ってあげるから!!」

そんな間にも大会はデットヒート。すでに多くの敗者と数少ない勝者が生まれていた。Aブロックでは早くも代表決定戦に入っている。

「沙都子、今回は絶対に勝つ！！俺は今負ける気がしないんだ。何故なら・・・俺はもうすでに地獄を体験したからだ！！」

「おーほっほっほ！！圭一さん如きに敗れる私ではないですよー！！」

そう、部活メンバー同士の一騎打ちである。

「はう~~~~お持ち帰りiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！」

「ちょ、レナ！？ストップ、すとっ・・・あーーーーー！！？」

一方のBブロック、暴走したレナに魅音が惨敗していた・・・。。。。そしてこのレナを見た梨花は戦慄が走り・・・。。。。

「・・・・・・・・み、自主棄権するのです。」

自ら身を引いた。そして再びAブロック。後ろで満面の、されど残酷な笑みを浮かべる永司を見た圭一は圧倒的な強さで勝利していた。

「そ・・・そんな・・・・・・・・」

「悪いな沙都子！！正直言って俺は地獄に戻りたくはないんだ！！」

「ふふふふ・・・・・・・・」

「え、永司が黒いのです・・・・・・・・あう・・・・・・・・」

そしてBブロックも当然のことながらレナが勝利し決勝はレナと圭一の対決となった。そんな中、アंकがこっそりと店の中に入り永

司を呼び出した。

「・・・・・・・・永司。」

「ん？・・・・・・・・アंक？どうしたの？」

永司はアंकの呼び出しに応じ羽入に後のことを任せこっそりと店を出る。

「行くぞ永司！！グリードの気配だ・・・・・・・・」

「つ・・・・・・・・わかった。」

二人はそのままライドベンダーを発車させ店を後にした。一方、店内の決勝戦は・・・・・・・・

「があああああ！？」

「はづ~~~~！！！！！！！！！！」

圭一がボロスカにやられてしまっていた。

・・・・・・・・10分後・・・・・・・・

「はづ~~~~かあいよいよ~~~~」

レナは優勝賞品のリコチャン人形を手に入れご満悦のようだ。

「ちつくしよ~~~~俺はぬいぐるみかよ・・・・・・・・」

しかし圭一は準優勝商品でもらった可愛らしいぬいぐるみをどつするかで迷っていた。

「あら？圭一さんにはお似合いですことよ〜。」

「んだと沙都子！！」

なぜか喧嘩を始める二人。いつもならここで永司の仲裁が入るのだがその永司はアंकとともに行動しているため喧嘩は止められなかった。

「たつく……ほら魅音、これやるよ。」

「うえ！？」

突然、ぬいぐるみを渡された魅音は驚きのあまり裏声になってしまった。

「お……おじさんはいらないよ！？だって……女の子っぽくないし……。」

「はあ？魅音、お前女の子だろ？ほら貰ってけて！！」

圭一は魅音の自転車のかごにぬいぐるみをつっ込んだ。魅音は照れながらもそれを受け取る。

「あ……ありがと……。わ、私バイトがあるから！！」

そういつて魅音はその場から逃げるように離れていった。

第5話 ゲーム大会（後書き）

質問感想、待ってマース。あと、甲殻類コンボ（サソリ カニ エビ）の名称募集もしてますので感想欄に送ってくださいーい。

第6話 園崎魅音くく鬼の名を継ぐ少女くく（前書き）

甲殻類名称の応募を締め切りました。応募ありがとうございます。
これから審査し次回の投稿で発表します。

第6話 園崎魅音くく鬼の名を継ぐ少女くく

ライドベンダーから降りた永司はアंकにグリードの場所を問いかける。

「アंक、グリードは？」

「……………来たぞ!!！」

アंकが叫びをあげた瞬間、永司の上空に影が現れる。永司はそれに素早く反応し側転でその謎の影を回避する。

「やっぱりな……………ゼツ!!！」

「ゼツ!?こいつが……………」

アंकはそのグリード……………ゼツを指さしながら睨みつける。永司は素早くドライバーを装着しメダルを装填し変身しようとする。
が……………

「オレハ……………ダレナンダ？」

この言葉により変身するのを止めた。アंकも戸惑い、ゼツを凝視している。

「アंक……………これって……………」

「ああ、記憶がないんだ……………先代との戦いの影響か？」

ゼツには記憶がない……。原因は不明だがこの事実は真実だった。

「ナア……。オレハダレナンド？」

ゼツは永司とアंकに近づきそう尋ねる。そこには800年前に暴虐の限りを尽くしたゼツはなくなただ真つ新の白紙に戻ってしまったゼツがいた。

「……………どうする？」

「どうするもこうするも……………」

二人はゼツをどうするかで迷ってしまった。過去のゼツは確かに危険で油断ならないのだが今ここにいるゼツはまるで子供のような純粹さしかなく対処がし辛いのだ。

「だが、俺はこいつ以外にもグリードの気配が……………」

「……………!!アंक、よけて!!！」

考え込むアंकを突如、永司が叫び声をあげ突き飛ばす。そして永司はその場でバック転し飛び掛かってきたウヴァを避ける。

「さすがはオーズだな!!！」

「お前だったかウヴァ。永司!!！」

「分かってる!変身!!！」

?タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タトバ、タ・ト・バ!!!?

永司は素早くオーズに変身。メダジャリバーを構えウヴアに向かっ
ていく。

「セイヤツ!」

「おらっ!」

ウヴアの爪とメダジャリバーの刃がぶつかり合い火花を散らす。オ
ーズはその体制を維持したまま左手をジャリバーの柄から離し、左
側のトラクローを展開しウヴアに攻撃をかける。

「はあ!」

「ちっ……」

ウヴアは素早くメダジャリバーを払いのけ両腕の爪でトラクローを
ガードする。ウヴアは舌打ちしながらオーズと距離をとりオーズも
メダジャリバーを構え直し体制を整える。

「オレハ……オレハ……?」

だがゼツはオーズたちが戦闘している間にその場を去っていく。ま
るで亡霊のような足取りで。

「まずい……」

「逃がすか!」

オーズはゼツを追おうとしたがウヴァに阻まれてしまう。

「アंक！チーターのメダルってあった？」

「ああ。落とすなよ！！」

アंकは右腕からチーターを取り出しオーズに向かって素早く投げる。

「よし。」

？タカ！トラ！チーター！？

タタバからタカトラーターにチェンジしたオーズはチーターレッグからスチームを出しながら高速移動。ウヴァを翻弄する。

「が……くそ、ぐわ！？」

メダジャリバーの刃にトラクローの爪、更にチーターレッグから繰り出される蹴りにウヴァは防戦一方になってしまう。オーズはオールドネストからセルメダル三枚を取り出しメダジャリバーに装填。スキヤナーでスキャンする。

？トリプル！スキヤニングチャージ！！？

「はああああ……」

オーズはオーズバツシュをウヴァに向かって放とうとしたが……

「うわ！？何これ！？」

自転車に乗った魅音がその場に現れた事で不発に終わってしまう。

「え、魅音ちゃん!？」

「なんだと……!？」

オーズとアंकは焦りの表情を見せる。一方ウヴァは魅音を見ると彼女に向かって話し掛ける。

「おまえ、好きな奴がいるな。」

「え、はい……。」

「そしてライバルも多い。お前はそれでもそいつを独占したいな？」

「はい……。」

オーズはまさかと思いい叫びをあげるが……

「駄目だ魅音ちゃん!！」

「その欲望、開放しろ。」

既に手遅れだった。

「あ……あ……。」

魅音の額にセルメダルが投入され白ヤミーが誕生する。更に白ヤミーはすぐに変化しミツバチャミーに変化した。

「ちー!!」

アंकは魅音をすぐさまヤミーから引き離しオーズにクワガタとカマキリを投げる。

「永司!!」

「っ……」

?クワガタ!カマキリ!チーター!?

ガタキリーターにチェンジしたオーズはカマキリソードでウヴァを払いのけアंकと魅音の本に向かう。

「魅音ちゃん!!」

「その声、永司さん!?!」

ウヴァはミツバチャミーに指示を出しその場を去る。

「あとは適当に頼む。」

「仰せのままに。」

ミツバチャミーはオーズたちに向かって針状の弾を撃つ。オーズはクワガタヘッドの雷撃で弾を迎撃。すべて撃ち落とす。

「私が……あれを……」

魅音は自身がミツバチャミーを生み出した事に絶望していた。

「私はただ・・・圭ちゃんに好かれたかっただけなのに・・・」

目尻に涙を溜めながらかすれた声で魅音は嘆く。

「確かに好きな人に好かれたいのは誰しも思うことだと思うよ。」

そんな魅音にオーズは静かに話す。

「みんな誰かを好きになりたいし好かれたい。ただ、無理やりその感情を押し付けちゃいけない。お互いに相手を思いやって初めて素晴らしいものになるんだ。」

「永司さん・・・」

「魅音ちゃんは純粹にそれを待ってただけだから何も悪くない。ただ、それも間違えばあんな風になっちゃうんだ。」

オーズはミツバチャミーを指差す。

「だから、そうならないように・・・その気持ちを持ち続けて。」

オーズはそれだけ言うと立ち上がりミツバチャミーと向き合う。しかし魅音はその瞬間気絶してしまう。

「魅音ちゃん!?!」

「心配するな。気を失っただけだ。お前はアイツとの戦いに集中し

る。」

アंकはそう言って魅音を守るように座る。

「はああああ……はああああ!!!」

ミツバチャミーは巢のような部分から大量の針を放出。しかもその針は次第に形を変え……

「ギ……」

「ギギ……」

大量のソルジャーホーネットとなった。

「「「ギギ!!!」」」

「だあ!?!く……うわああああ!?!?」

「永司!!!」

数の暴力とはこの事か。オーズはなすすべなくソルジャーホーネットたちに圧倒される。アंकは自分に向かってきたホーネットを投げ飛ばすと魅音を抱えその場を跳躍。後ろにある段差の上に退避する。

「はああ!!!うわ!?!」

オーズは何とか反撃したがっていたがいかにせん相手の数に押されてしまう。そんな時、オーズは何かを思い出したかのように立ち上

がりバッタのメダルを取り出した。

「アंक！これ緑のメダルのコンボでしょ!?!」

「バカ、お前この世界ではまだコンボがどんな影響を与えるかわからないんだぞ!?!」

アंकはコンボの危険性を考えオーズを止めようとするが……

「でも、やるしかない!」

オーズはアंकの制止を振り切りチーターをバッタに入れ替える。

「頼む……変身!」

?クワガタ!カマキリ!バッタ!ガータ、ガタガタキリッバ!ガタキリバ!?!?

姿を緑一色に変えたオーズ。大自然に生きる昆虫の力をその身に宿すオーズのコンボ形態の一つ……ガタキリバコンボへ。

「うおおおおおおお!?!?!」

オーズは雄たけびを上げ、ホーネット軍団に突撃する。走っていく中でオーズは一人から二人、二人から四人に分身し、総勢50人のガタキリバになりながら。

「はあ!」

「うおおおお!」

「やああー!!」

ガタキリバは数の計算上では負けていたが個々のスペックは軽くホーネットを上回っている。そのため、ホーネットたちは次々に敗れていく。

「グガ!?!」

「ギギ!?!」

ある個体はバツタレグで蹴り上げ、またある個体はカマキリソードで切り裂く。50人それぞれがそれぞれの行動をし相手を次々と倒していく。これを見たミツバチャミーは焦りと恐怖を覚え始める。

「く……あ……このお!?!」

ミツバチャミーは羽から衝撃波攻撃を繰り出す。これに対しオーズ軍団は雷撃の一斉掃射。50もの雷撃に敵うはずもなくミツバチャミーはボロボロになってしまう。

「ぐ……があ……」

オーズ軍団はホーネットをかたずけると一斉にスキヤニングチャージを行う。

?????スキヤニングチャージ!?!?????

「「「「「はあああああ!?!」「」「」」」

「『『『『せいやああああ！！！！』』』』」

50人のオーズが一斉にミツバチャミーに対してキックを放つ。四方八方から迫るガタキリバキックをよけることはできず……

「があああああああ！！？」

ミツバチャミーはそのまま爆発四散した。辺りにはセルメダルが散らばる。しかしオーズは一人に戻るとすぐにライドベンダーに乗り込み……

「俺はゼツを追う。アंक、魅音ちゃんを任せたよ！！」

「っ……おい永司！！」

オーズはアंकの言葉を無視しそのままライドベンダーを走らせていった。

……???.

私は小さいときに詩音と入れ替わった。詩音が魅音になって魅音が詩音になった。そのせいで過去の世界で多くの惨劇を生み出してしまった。みんなは過去の世界から何かを学んで次の世界に受け継がれたのに私にはそれがまったくと言ってなかった。でも、この世界は違うよ……。だって、私も頑張るんだから……。

……興宮……

「ん……」

魅音が静かに目を覚ました。アंकはそれを見ると魅音をゆすり意識がはつきりしているか確かめる。

「痛っ!?!」

「おし、意識は大丈夫だな。……ここで待つてる。」

アंकはそういうとセルメダルを取り出しライドベンダーからタカカンドロイドを取り出しメモを銜えさせ圭一たちのところに飛ばす。

「お前はここにいろ。前原や古手がここに来るはずだ。」

「あ、ちよつと!?!」

アंकはそれだけ言うとライドベンダーに搭乗し永司を追いかけっていく。

「あのバカが……!!」

……山道……

オーズはライドベンダーで駆け上がっていた。しかし一向にゼツを見つげられない。

「どこに……」

やがて公道を外れ山道に入るオーズ。しかし道が狭くなってきたためライドベンダーを降り携帯モードに戻す。

「……」

慎重に道をオーズは進んでいく。そんな時、

「はあああ!!!!」

「ふん!!」

「な・・・!!?」

突如、メズールとカザリが襲い掛かってきた。オーズは側転で攻撃を回避するが・・・

「うおおお!!」

「ガメル!?!」

そこにガメルの思いこぶしが振り下ろされる。バッタレッグの跳躍で何とかこれは避けることができたが・・・

「もらったあ!!」

「ぐわああああ!!!!」

ウヴァが現れオーズを爪で切り裂いた。しかも連戦のせいか、クワガタとカマキリのメダルがドライバーから飛び出してしまい、変身が解除されてしまう。

「っ・・・」

「他人とはわかっていても・・・やっぱりあまり気持ちが悪くない

いわね……………」

ウヴァは2枚のコアを取り込みながらほかのグリードと合流する。しかしウヴァとメズールはあまり嬉しそうではない。

「エイジス……………」

カザリが静かに名前を呟く。永司はその名をグリードたちに問いかける。

「その…………エイジスって誰……………」

「……………」

カザリは黙り込んでしまう。そして少しの間が空きメズールが答える。

「先代オーズの…………名前よ。」

「っ!?!?」

「…………エイジス・ヴァルティード。800年前にオーズに変身した男だ。」

グリードたちから出た先代の名。永司はそれに驚愕しながらも何とか立とうとする。しかしヤミーとの戦いの疲労のせいで足元がおぼつかないでいた。

「悪いけど…………メダルは返してもらおうよ!?!?」

カザリがそんな永司に向かってくる。しかしその間に突如としてオーロラが発生する。

「!?!」

「なんだ!?!」

そしてそのオーロラから……一人の男性とロボットが現れた。

「うーむ、異世界にわたるってスリル……なかなか楽しめたじゃん!?!」

「香取宗司氏、今は永司様の救助を。」

「わかってるって……さあつて、レッツスタート!?!」

ロボットはどことなくタトバにそっくりな姿をしている。ただし体色はシルバーと黒になっている。ロボットはまるで中央部がカプセルのようなベルトに装備していた銃でグリードたちを威嚇する。

「アインス・ワン、これより戦闘を開始します!?!」

そして香取と呼ばれた男はオーズドライバーと酷似したベルトを取り出し装着。昆虫系セルメダル3枚を装填しそばに飛行しているカブトムシ型のメカを手取る。

「オーズに俺たちのお披露目と行こうじゃねえか……カブトコア!?!」

「キュイイイイン!?!」

「変身！！」

香取はそう叫びカブトコアでセルを読み取っていく。

？クワガタ！クワガタ！バッタ！ギン！ギン！！ギン！！！！？

香取は読み取った後、カブトコアを右腰に装着。発せられた音声とともに新たな姿が香取を覆っていく。まるでヘラクレスオオカブトのような力強い一本角。ウヴァに類似している上半身。バッタレツグのような脚部。そしてシルバーとメタリックグリーンを基調とする色。

「ファーストとウヴァの初陣だ！！派手に決めようじゃねえか！！」

オリジナルのオーズには存在しなかったライダー……。仮面ライダーウヴァと仮面ライダーファーストがこの世界に降り立った。

~~~~~現在のオーズの所持メダル~~~~~

タカ×2 トラ バッタ チーター オオカミ キツネ

第6話 園崎魅音くく鬼の名を継ぐ少女くく（後書き）

今回、伸剣さんと山竜さんのアイデアが登場しました！お待たせしました！あと、言い忘れてましたが7月24日に16歳になりました（笑）

第7話 セルライダーズ（前書き）

今回は短いです。

## 第7話 セルライダーズ

突如、世界を超えやってきた「オーズの世界」のライダーたち。永司はふらつきながらも立ち上がりメダル3枚を手取る。

「永司様！ここはお休みに・・・」

「大丈夫・・・これぐらいならまだいけます！変身！！」

？タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タトバ、タ・ト・バ！！？

再びオーズに変身した永司。それを見たウーヴァは口笛を吹きながら感嘆していた。

「ヒュウ・・・なかなかやる旦那だなあ・・・こりゃみっともねえ戦いはできねえな・・・」

ウーヴァはカザリの爪とガメルの鉄拳をあしらいながらそう呟く。一方、ファーストはセルメダルを弾丸にして放つファーストバスターでウーヴァを中距離から射撃していた。

「ぐ・・・こつちに來いこの鉄野郎！！」

「距離を取るのも立派な戦術の一つだ！」

そしてオーズはメズールと近距離戦を繰り広げる。しかしメズールはあまり積極的な攻撃はしてこなかった。

「・・・？」

「……………」

オーズはそれを疑問に思ったのか攻撃の手を緩める。それを見たメズールも攻撃を完全に止めオーズに話しかける。

「やっぱり……………こんな所までエイジスとそっくりね。」

「そんなに俺とそのエイジスって人……………似てるの？」

「ええ……………常にだれかを守るために自分を犠牲する。そして自身に欲がない。そんな人よ。」

それはまるで永司のことを指し示すかのような人物。先代は永司と寸分も狂いがない人物のようだった。

「……………アंकは元気？」

「え、あ……………ああ……………」

オーズは突如出てきたアंकの名に驚いた。メズールのほうはそれを聞いて安心したかのような返事を返し……………

「そう……………なら、受け取りなさい。」

「わ……………とつと……………」

突如、自身のコアメダルを渡してきた。

「アंकのことをよろしく頼むわねオーズ。アंक、あれで結構傷

つきやすいから。」

「え……それってどうゆう……」

メズールは永司が言い終わる前にその場を去っていく。オーズはメズールを追いかけようとしたがウヴァやファーストの事も気になり仕方なく断念する。そしてメズールから渡されたウナギとあらかじめ持っていたチーターをドライバーに装填する。

？タカ！ウナギ！チーター！？

タカウーターにチェンジしたオーズはウナギウィップを手にウヴァとカザリを攻撃する。

「やつ！！」

「ぐー！？」

「おっと……」

ウヴァには命中したがカザリは爪でそれを弾き返しダメージを回避した。

「ファイア！！」

しかしそこからファーストバスターの銃弾を打ち込まれ……

「もらい！！」

「ガフツ！？」



ウーヴアのサマーソルトキックを喰らいライオンのメダルを失った。

「お、コアメダル。おおーいオーズ!!」

「はい?」

ウーヴアはガメルの拳を避けていたオーズにライオンを投げつけた。

「わつと!?これって……よし!!」

オーズはタカをライオンに入れ替えメダルをスキャンする。

?ライオン!ウナギ!チーター!?

ラウーターとなったオーズは手から水流を放出。ガメルと距離を作ることに成功する。

「おう!?!」

「今のうちに……」

オーズはチーターレグで高速移動を開始。ウヴァとカザリにそれぞれ蹴りを入れるとウーヴアたちの居るところに移動した。

「おおー。さすがはオーズ!!」

「まあ……どうも。」

一方、グリードたちは何とかしてオーズからメダルを強奪しようと

動き出す。

「僕のメダル……返してもらおうよ!」

「俺のもな!」

「メズールのコア……かえせ!」

ファーストとウーヴァはそれぞれ戦闘態勢を整えるがオーズはそれを手で制止し言い放つ。

「ここは任せてください。二人とも、まだこの世界に来たばかりだし……」

「しかし……!」

「よせ、アインス。ここは旦那に任せてみようぜ。」

ウーヴァがファーストを抑え、オーズを向かわせる。オーズはチーターレグで一気にグリードとの距離を詰めるとウナギウィップで攻撃する。

「はあああ!」

「ち……」

「おっと。」

「……あぶない……!」

グリードたちはウナギウィップの攻撃を避ける。オーズはそのままの状態で水流を発射し追撃を行う。

「……………仕方ない、こいつで一気に決める。」

オーズはそのままではらちが明かないと判断しトラメダルを取り出す。

「ラトラーターになるのは2回目だな…………。」

オーズはドライバーのメダルを猫系メダルに揃えるとそのままオーズキャナーでスキャンしていく。

?ライオン!トラ!チーター!ラタ、ラタラトラーター!?!?

「うおおおおおおお!?!?!」

…………山道…………

ライドベンダーで山道を走るアंकは山の一部分が光つたのを見て焦りを見せる。

「いくら耐性が強いからといって、疲労状態での連続コンボはヤバいぞ…………!?!」

アंकはライドベンダーの速度を上げ、光があった場所へと急いだ。

…………興宮市内…………

魅音を迎えにきていた圭一たちも山の光を見ていた。

「あの光って……永司さん!？」

「またオーズになってるのね……」

しかし、先程戦闘に巻き込まれた魅音はオーズの戦いを見ていたせいか血の気が引いていた。

「マズいよ……永司さん、さっき戦ってすごいダメージ受けたのに!！」

「あう!？」

「そんな……!？」

「何とかして追いかけないと!！」

焦る面々だったがあの山まで自転車で行くのは時間がかかる。車がベストなのだがそんな都合よくは……

「あら?お姉に圭ちゃんに梨花ちゃまと……誰？」

「詩音さん、初対面でその発言はどうかと……」

いってしまった。魅音の双子の妹の園崎詩音と園崎組の一員で詩音の付き人の葛西辰由が乗る黒い自動車が来たのだった。

「詩音に葛西さん!!丁度よかった。俺たちを乗せてくれないか!？」

「それは構いませんがどちらへ？」

「あの山なのですよ！あうあう！！」

羽入が山を指さしながら答える。

「うーむ、どうします葛西？」

「何やら慌ただしい感じがしますね。緊急の事態でしょうか？」

「ああ！！詩音は知らないかもしれないけど、葛西さんはアンクって人を知ってますよね？」

圭一はアンクの使っていたいたタカカンとタコカンに自転車を持って帰らせるように指示した後、葛西に話しかける。

「ええ……間宮リナの件で何度かお会いしましたし、協力もしました。」

現在、梨花の抱える仲間の危機問題。そのうち圭一、魅音は過去の世界での記憶を取り戻したため問題ないが、今目の前にいる詩音、父が美人局にあっているレナ、そして北条家の沙都子。この3人には惨劇のトリガーとなる可能性がまだ残っていた。そして今話している内容はその残った3人に関する内容だった。

「そのアンクさんの知り合いの神童永司さんが危ないんだ！！だからお願いします！！！」

「わかりました。乗ってください。少し荒っぽくなりますが我慢してください。」

そして圭一たちを乗せた車は猛スピードで山に向かった。

・・・山内・・・

ラトラーターコンボの固有能力「熱線放出」であるライオディアスの光が薄くなるとラトラーターコンボとなったオーズが姿を表した。

「おいおい・・・こりゃたまげたぞ。」

そう呟くウーヴァはオーズを見つめる。それもその筈、オーズの周りの木々は先程のライオディアスが原因で焼け焦げていたからだ。本来ならもつと威力の高いライオディアスを放つことができるのだがここが山中である事を考慮したオーズがライオディアスの出力を限界まで下げていた。が、それでもオーズ周辺の木々は見る影もなく焼け焦げ光は辺り一帯を覆っていたのだ。幸いな事にこの時間帯は殆どの人が買い物や夕飯の支度をしており山の方角を見ることはない。発見したごく一部の人も気のせいと割り切り圭一たちのように事情を知らなければその光を追求しようとはしなかった。

「へえ、あんなにボロボロな体でコンボを使うんだ。」

カザリはラトラーターを見ながらそう吐き捨てる。

「生憎・・・こんな事でもしないと勝てそうにないからね。」

オーズは息を切らしながらも強い意志を秘めた声でそう言い切る。両腕のトラクローを展開したオーズはチーターレッグの高速移動でグリードたちとの距離を詰める。

「うっ~~~~めが~~~~!!」

すでにライオディアスの光で弱っているガメルには手を出さずにいまだ健在なウヴァとカザリを相手にする。トラクローとグリード二人の爪が火花を散らせあう。オーズは隙を突きミドルキックを繰り返す。しかしウヴァはそれを回避する。カザリが飛び掛かってこぶしを放つ。オーズが防御しカウンターパンチを叩き込む。そして体勢を崩したカザリをウヴァに投げ飛ばし追撃のスピキックを放つ。

「うわ!?!」

「ぐお!?!」

吹き飛ばされた二人はガメルに衝突、その際ガメルからメダル3枚が飛び出す。それに気が付かないオーズはスキヤナーを手にメダルを再スキヤンする。

?スキヤニングチャージ!?!?

前方に現れた3つのリングを通過しオーズはガツシユクロスを繰り返す。しかし……

「……………あ」

グリードたちにあたる直前、オーズは突如、失速しそのまま倒れこんでしまう。その際、オーズの変身も解除されグリードたちのほうにチーターのメダルが転がっていく。

「……………どうやらコンボの使い過ぎだね。今のうちに退散しよう。」

「ち、鉄野郎覚えてろ!!」

「私は鉄野郎ではない。ファーストだ。」

「ああ〜まって〜!!」

グリードたちは永司が倒れたすきを突きその場を後にする。ファーストは倒れた永司を担ぎ、森を抜けようとする。変身を解除した香取だがふと足元に目をやると3枚のメダルが落ちていることに気づく。

「ん……?これって……」

しかし香取は永司が運ばれていることもありそれをポケットに突っ込むとファーストの後を追っていった。

~~~~現在のオーズの所持メダル~~~~

タカ×2 トラ バッタ オオカミ キツネ ライオン ウナギ

第7話 セルライダーズ（後書き）

次回は戦闘なしの話です。

第8話 先代と錬金術と神の語らい（前書き）

久々の更新！！微妙に短いです。

第8話 先代と錬金術と神の語り

・・・????・・・

何もない漆黒の世界に永司はいた。それは宇宙とも違う紛れもない？無？の世界だということだけが永司は理解できた。永司はひとまず体を起こしふと、ポケットに手をやる。

「っ！？メダルが無い・・・ドライバーも!？」

そこには有るはずのものがなかった。慌てる永司だったがふと横に目をやると一つの眩い光が彼方に見えた。

「光？」

永司は光の有る方向に走り出す。光が有る場所まではそこまで遠くなかった。だが光の有る場所に着いたとき、永司は心底驚いてしまふ。何故なら・・・

「ヒヒイイイイン!!！」

美しい鳴き声で永司を迎えた聖なる一角獣？ユニコーン？。

「クオオオオオオオ!!！」

猛々しい叫びを上げる大いなる翼？グリフォン？。

「ガアアアアアア!!！」

見るものを威圧し、その存在感を示す荒ぶる巨獣？ドラゴン？。

「……………」

そしてそれらの幻獣たちを従えるように立つ光の正体、遙かな昔より世界から崇められる神がそこにはいた。

「これって……………神様！？それにこの動物達って……………」

混乱し始める永司だったが、その永司の前にひとりの青年が現れる。

「やあ、神童永司君。」

「え……………？あなたは？」

青年はお辞儀をすると自身の名前を告げる。そしてそれと共に露わになった顔に永司は驚愕した。

「エイジス・ヴァルティード。先代の仮面ライダーオーズだよ。」

「え！？先代……………オーズ！？それに……………顔が……………」

その顔は……………永司と瓜二つの顔。唯一の違いはエイジスの目は黒ではなく燃え盛るような赤色だったことだ。

「その話は今はできない。時期が来たら教えてあげるよ。今日は君にコアメダルのお話をしに来たんだ。」

「コアメダルの？」

「そう、コアメダルを知っていればオーズの戦いは有利になるし、これからの君のためでもある。」

「ええつと……まずこいつてどこですか？」

「うーん……まあ……現実と夢の狭間……って
いべきかな？」

「な、なんか凄い非現実的な所なんですね……」

永司の言葉にエイジスは笑みを浮かべながら返事を返す。

「それを言ったらオーズやグリッド、コアメダルも非現実的だよ？」

「あ、そうだった……」

エイジスは静かに頷いてから指を弾く。その瞬間、周りの空間は歪み辺りの風景は地球の……800年前のヨーロッパに変わる。

「おおー！凄いいー！」

「コアメダルは古代ヨーロッパのとある王が他を凌駕する力を欲し、錬金術師たちに命令して創らせた物なんだ。」

エイジスはまた指を弾き古代ヨーロッパの錬金術師たちの姿を映し出す。

「当然、最初は失敗の連続だった。」

エイジスは錬金術師たちを指差す。そこには創ったコアメダルが粉

々に砕ける様子と悔しがる錬金術師たちの姿が映し出されていた。

「あ、割れた……」

「知つての通り、コアメダルは欲望を力の源にしている。でもその欲望を受け止めるだけの技術はなかったんだ。」

エイジスは静かに研究室を歩く。そして一枚の絵の前で足を止める。

「そこで錬金術師たちは考えた。欲望そのものを力に出来ないのなら？欲望を宿したものを力に変えようと。」

エイジスの立ち止まった絵には無数の種を問わぬ生物たちが描かれていた。

「その結果が出るのにさほど時間はかからなかった。そして？初めて完成したコアメダル？が……」

歓喜の渦にいる錬金術師たちの時を再び停止させ、エイジスは完成したコアメダル三枚を永司に投げる。永司はそれを掴み取りそして驚愕した。

「これって……！！」

「そう、最初の三枚のコアメダルこそ……」

エイジスはそこで息を止め、そして静かに言い放つ。

「？タトバコンボ？だ。」

・・・雛見沢 山道・・・

永司を探しに来たアंकは森から永司を担いで出てきたファーストと香取を発見する。

「お前ら、何者だ!？」

「おりよ!？・・・あんだアंकか？」

香取は一瞬素つ頓狂な声を上げたがすぐに調子を元に直すとアंकに話しかけた。

「お前・・・タダの人間じゃないな。それにそつちの機械も。」

「君もさすがだよアंक。一瞬で僕を人じゃないと看破するなんて

な。」

「その通り。俺たちはオースの世界の……まあ簡単にいうと鴻上の旦那のお使いだな。」

「アイツの!？」

そんな中、一台の黒い車がこちらに向かってきた。

「……また手間がかかりそうだな。」

アंकは多分、今まで一番大きなため息をはいた。

「……?????」

「タトバコンボが……最初のメダル？」

「ああ。君も気になってはいただろ？タトバコンボはコンボの名を冠しているのに三枚バラバラの形成、他のコンボに比べて疲労がなぐガタキリバのブランチシェイドやラトラーターのライオディアスのような特殊能力が存在していないことに。」

「はい。でもどうして？」

エイジスは過去のメダルを錬金術師たちのもとに戻すと改めて永司に話し始める。

「どんなものを作るにしても、最初からすごいものは出来ない。基礎があつてそこから発展していく。」

「タトバコンボが基礎ってことですね。」

「そう。タトバコンボが完成したことでオーズドライバー、コアメダルは次々と完成していった。まあ、アングのメダルはだいぶ力を注いだから、他のメダルより力が増したけどね。」

エイジスは笑いながら赤いメダルをいじっている。それを見ていた永司は何かに気がついたようにエイジスに問いかけた。

「そう言えば、エイジスさんはどうしてオーズになつたんですか？」

エイジスは赤いメダルを元に戻しながらあっけからんとして、

「偶然。」

とだけ答えた。

「そ、そうですか……」

永司は驚きながら椅子に手をかける。と、永司は気付いた。

「うわ！？手が透けてる!？」

「どうやら時間みたいだ。永司くん、今からいうことをよく聞いて。」

エイジスは先程のような気楽な顔ではなく引き締まった？戦士？の表情で永司に告げた。

「ゼツは今は記憶を無くして大人しい。でもそれは彼の記憶を宿し

た？オオカミ？のコアメダルを君たちが所持してるからなんだ。だから、そのメダルを渡してしまったら取り返しが着かない事態になる。君たちはそのメダルを守り抜いてくれ。・・・もし万が一、ゼツの手に渡った場合、彼のコアメダルで形成される？カルオオツネコンボ？で彼を倒すんだ。・・・800年前、一度も使われることがなかったコンボだけど、君にやら使いこなせるはずだ！よろしく頼む！！」

「あ、エイジスさん！！」

永司の意識はその叫びと共に途切れた。

・・・雛見沢 前原宅・・・

「エイジスさん！！」

「どわ！？」

「あだつ！？」

永司は目覚めた勢いで圭一の額と激突。両者、軽くダメージを受けた。

「あ・・・俺は大丈夫だけど、圭一君は！？」

「俺も大丈夫です・・・。はあ、良かったですよほんとに。」

永司は上体を起こしながら「ごめんね。」と言った。

・・・??????...

「さて……この世界とこのカケラはどうなるんだろうな……
・羽入？」

エイジスは隣にいた羽入に話しかける。

「永司の世界の人たちに話を聞いたばかりなのでまだ実感はわからないですよ……。」

「そりゃそうだ。唐突に告げられて鵜呑みにはできないさ。……
オヤシロ様……羽入と呼んだほうがいいか？それとも……
ハイリリユーン・イエアソムール・ジエダと呼ぶべきか？」

エイジスはその赤い目で羽入を見つめる。

「……人に生まれながら神に等しき力を得た者よ、お互いに余計な詮索は控えぬか？」

「……そうだな。でも俺のことはほかのやつ……とくにア
ンクや永司には話さないでくれよ？」

「そなたは私を信じられないか？」

「そりゃ、普段のあんたを見てたら心配になってくるさ……。」

「……エイジス酷いのです！！あうあうあうあうあう！！
！！」

羽入はオヤシロ様の様子から普段の様子に逆戻りしてしまった。

「……しかし、こうも厄介になるとはな……。」

「……永司は既にそなたの言う？真のオーズ？に近づきつつある。それがいけないことなのか？」

「……いざというときには俺が何とかするが……俺は既に死人の身だ。そう長くは留まれないさ。……？無の力？が永司に入り込む前に、こいつを渡しとかねえと……。」

エイジスはなにも生物が描かれていない真っ白のコアメダルを持ちながらそう呟く。

「……永司はそなたの？　だからな。そう心配せずとも、無の力を使いこなせると思うが？」

「そりゃあ、使うのは問題じゃない。……俺はそれによって生じるデメリットを危惧している。……もう、アंकやウヴァ、カザリやメズール、ガメルに……あんな思いはさせたくない。」

エイジスの表情はどこか物悲しい……そんな表情だった。

「だが、まずは……目先の問題を何とかせねば……な。」

「ああ……まずは……。」

「？永崩しのカケラ？と？オーズの世界？の融合を何とかしないと・・・」

第8話 先代と錬金術と神の語り(後書き)

感想待ってます。

第9話 変化と財団と運命の切り札（前書き）

長いことお任せしました！！では、どうぞー！！

第9話 変化と財団と運命の切り札

・・・前原宅・・・

「おう、起きたか永司。」

「あ、うん。・・・うわあ、朝の9時って・・・。」

どうやら永司は10時間ほど寝続けてしまったようだ。時刻は既に9時半を過ぎている。

「あ、いろいろお話することがあるんで・・・もう少ししたらみんなが家に来ます。」

そして20分後、圭一の家には梨花、羽入、魅音、詩音、香取、待機モードにして男性に擬態しているアインズことファースト、そして・・・

「い、後藤さん！？それに・・・姫奈ちゃん！？」

「まあ、驚くだろうな。」

「永司君・・・ごめんね？」

朝矢、姫奈が集まった。

「ど・・・どうして!?!?」

「・・・永司、エイジスからは何も聞いてないのですか？」

「え……っと、聞いたのはコアメダルの事とあとはゼツの事だけど……」

それを聞いたアंकはやれやれといったような顔で話し始める。

「あんの馬鹿……一番重大なことを伝えてないな。……何のためにオーズドライバーに自分の意識を残したんだ。」

「っていつか、アंक俺がエイジスさんと話したの知ってるの!？」

「ん?ああ、羽入から聞いた。となると俺が考えられるのはそれしかねえからな。」

「……正確には違うのです。でもまだ言うべきじゃないのです。」

そして話題はこの世界の危機と朝矢、姫奈がなぜここにいるかになった。

「実はな永司……昨日判明したことが2つある。」

「えっと、神童永司さんでしたよね?私は園崎詩音です。」

「あ、初めまして。」

そしてアंकは判明した二つの出来事を話し始める。

「まず一つ目だが……園崎詩音は記憶を引き継いでいる。」

「え!？」

「……初めはみんな、普通に鷹野さんと話したりしてたから変な夢を見てたのになって思っていました。けど昨日、圭ちゃんたちに相談したら……」

「……なるほどね。」

「こんなこと……これまではなかったわ。かろうじて圭がおもいだすぐらいなのに……。」

梨花が素の喋りで話す。最もみんなこれまでの記憶を持っているのでさして気にしていない。そして話題はもう一つの問題へ。

「もう一つなんだが……結構厄介でな……。」

「……。」

アंकは一息入れた後に話す。

「……この世界と俺たちの世界が融合しているらしい。」

「!？」

永司は誰の目にもわかるほどに動揺した。

「じゃあ、後藤さんに姫奈ちゃんがここにいるのって……」

「ああ、お前の察した通り……俺たちの世界が混じってきた証明だろう。」

?その通り!!!??

突如として大きな声が響き渡る。その声を出したのは……

「わ、私ではありません!?!」

「あー………鴻上さん?アインスにえっらい迷惑かけてるんだが………」

香取はアインスを通じて話している鴻上に意見した。

?おっと、すまないねアインス・ワン!!!だが、あいにくと君を通じないと私はそちらと会話ができない!!!我慢、してくれるね???

「……orz」

ロボットとしては多機能なのは誇らしいだろうが、こればかりはアインス・ワンもまいつているようだ。

?天野姫奈くんの後藤君がそちらの世界に迷い込んだのは間違いない融合影響だ。本来、仮面ライダーという大きな力の核が我々仮面ライダーの世界を安定させている。そしてライダーが存在せず、大きな力といえるものがない世界では下手な干渉がない限りの安定だ。今回のことをまとめると君たちの世界……まあ、ひぐらしの世界と名付けるとしよう。ひぐらしの世界にオーズの世界のグリードたちが進入した。ひぐらしの世界はグリードという病原菌を排除するためオーズという治療薬を投入する。しかし、オーズという核を失ったオーズの世界はオーズの存在するひぐらしの世界にオーズを求

めて近づいていく。ひぐらしの世界は体内の病原菌を退治するまでオーズを手放さない。そして二つの世界が融合し始めているわけだ。我々も世界の管理者たちの一人、剣崎一真くんからその事を聞かされてね。しかし時すでに遅し。融合は避けることが不可能な所にまで進んでいたのだ。？」

「そんな・・・じゃあ世界は！？ 雛見沢や永司たちの世界はどうなるのよ！？」

梨花が叫ぶ。それはこの場にいる誰もが思っていることだ。

？その通り！！そこで我々はある解決策を試すことになった。世界の融合を止められないなら・・・いつそのこと、新たな世界を作りだそうと！！？

アインスを通じて話す鴻上はそう答えた。

「・・・成る程な。読めたぞ、お前の考えが！！」

「成る程。確かにその方法なら、一番安全確率が高いですね。」

「しかし鴻上さんもよく考えるよ。おじさん感心するよ。」

「ああ、俺も分かった！！」

アंक、永司、魅音、圭一が鴻上の意図に気づいたようだ。

「一体、どういう事？」

「あうあう・・・僕にもわかるようにしてほしいです。」

「そうですね。お姉たちだけわかって私たちは置いてけぼりはズル
と思いますよ。」

「あの、私もわからないんですけど？」

一方、梨花に羽入、詩音に姫奈はまだ分かってはいないようだ。

「つまりは逆転の発想だよ。私たちの世界と永司さんたちの世界が
混ざり合ってるのは分かるね？でも私たちの世界と永司さんたちの
世界はそれぞれが違うものなんだ。例えば、牛乳とお茶を混ぜたら
何かわからないグチャグチャなものができる。でもお茶とお茶、牛
乳と牛乳だったら？」

「……あ！？」

「気づいたね。鴻上さんはね、仮面ライダーという強大な力をこっ
ちに送り込んでこの世界をオースの世界にしちゃって融合を安全に
行おうとしているんだ。時代、技術、歴史が進んだオースの世界を
ベースに私たちの世界を混ぜ合わせて新しいオースの世界を。」

どのみち融合が避けられないのなら安全に融合を進めようという。
まさに斜めを向いた発想だと言えるだろう。

「でもそれだとよ、俺たちって一気に大人にならないか？だって、
聞いた話じゃあ永司さんたちは昭和の後の平成って元号で生まれて
るんだろ？それにそんなことしたらみんなパニックに……」

圭一が疑問点を上げる。それはこの場にいるみんなが気になること
だった。……永司とアंक以外は。

「いや、たぶん大丈夫だと思うよ。そうじゃなきゃ、今頃俺とアングは戸籍がなくて大石さんや赤坂さんに捕まってるだろうし。羽入ちゃんみたいになんとかなってると思うよ。」

「ああ。世界つてのは不都合な細かい事情なんかは都合がいいように修正するしな。俺も昔に似たような事を経験している。記憶も都合がいいように変えてるだろう。」

この疑問も2人の意見によりクリアした。

「んで、俺たちもこっちの世界に来て融合の安定化を助けると同時にオーズたちをサポートをするってわけ。」

「では香取氏。改めて我々も自己紹介をしましょう。」

朝矢に姫奈は既に自己紹介を終えているらしく、今度はアイン스에香取が自己紹介をする事になった。

「私は仮面ライダーファーストことファーストシステムのAIであるアインス・ワンと申します。アインスとお呼びください。ファーストシステムは元来、対ヤミー、グリードを目的として開発されました。しかしオーズの復活によりコアメダルの奪取などのサポートユニットとして再設計された経緯があります。なので私のマスターには永司様が設定されております。以後、宜しくお願い致します。」

「俺は香取宗司。歳は24！元何でも屋だ！！好きなもんはスリル！！鴻上さんに年収1億で雇われてんだ。んでもって、仮面ライダーウーヴァー！！宜しく頼むわ！！」

こうして、この場はお開きになった。だが、先ほどから永司は何かの視線を感じていて仕方がなかった。

（さっきから俺に対して向けられているこの視線……これって……）

永司は家に残っているアंकと圭一に少し出かけてくるとだけ伝えて出ていく。……その間際、アंकが永司に耳打ちするとともに何枚かのメダルを渡してきた。

（永司、気をつける……。この視線の持ち主はただものじゃない。こいつを持っていけ。）

（わかった。アंक、圭一君たちを頼むよ。）

永司は外に出るとすぐに携帯ベンダーを起動させ視線を引き付ける。視線の主もそのまま永司を追跡する。

「……」

永司はそのままベンダーを走らせゴミ山に誘い込む。……視線の主はベンダーが停止したと同時にその姿を現す。

「……お望み通りかなオーズ。」

「あなたは誰ですか……？」

「私は、財団Xのスルースというものです。」

「……財団、X？」

? s n a k e ?

スルースは懐から……? ガイアメモリ? を取り出し起動する。

「っ! ?」

永司は見たことがないアイテムを取り出した相手に警戒を強める。
瞬時にオーズドライバーを巻きつける。そしてアंकから預かった
ライオン、ウナギ、キツネをドライバーに装填しいつでも変身でき
るように構える。

……ゴミ山……

「うーん、なかなか取り出せないかな……かな?」

レナはいつも通り、お宝を探してゴミ山に来ていた。が、お目当て
のものが取り出せないようだ。

「……あれ、あっちの方で声が……」

……そして、惨劇への扉へと続くかもしれない出来事が起こって
しまった。

「……あれ、永司さんかな、かな?」

レナは永司と対峙する謎の男性を見つけてしまったのだ。レナは隠
れて彼らの会話を聞こうとする。

「私の目的は君の持つオーズドライバーだ。それを研究し、我々で

有意義に使ってあげよう。当然、謝礼を払う。君はオーズとして戦う必要がなくなり自由と富を得るぞ？悪くない話だろう。」

「生憎ですが、お話になりませんね。俺はオーズとして戦っていることに対して後悔はしてませんし、何よりあなた達にこの力は渡してはいけない。そんな気がします。残念ですが交渉話は無しにしてもらいますよ?」

「残念だ……では、実力行使といこう。」

男性はUSBメモリのようなものを掌に差し込むと、途端に蛇のような化け物に変化する。

「な、何なのかな……かな……」

レナはそれを見るとショックを受けた。無理もない。突如、目の前で人間が蛇の怪物に変化したのだから。

「く……戦うしかないのか!?変身!?!」

永司もそれを見るとスクヤナーを手に取りメダルを読み込んでいく。

？ライオン！ウナギ！キツネ!？

そして……永司の姿も異形の戦士へと変貌を遂げる。

「……………」

レナはそれを見ると……ふらふらした足取りで来た道を引き返していった。

・・・ゴミ山（永司 view）・・・

ラウーツネに変身した永司はスルースが変化したスネークドールパンと一定の距離を保ちながらにらみ合う。オーズの手にはすでにウナギウィップを構えている。

「ここは退いてもらえませんか？俺としては、怪物に変化したとはいえ・・・人間には手を上げたくないんです。」

「それは気高い精神ですね。ですが私も仕事の関係上、ここで引くという選択をできないのですよ。」

両者はにらみ合いながらも動く気配を見せない。・・・お互いが静かにけん制しあい、相手の出方を見ようとしているのだ。

「・・・むんっ!!！」

先に仕掛けたのはスネークDドールパンだった。しなやかな肢体の動きでオーズに詰め寄りそのまま腹部に強烈なタイキックを打ち込む。

「ぐはっ・・・!？」

オーズは寸前で体をそらしたが回避にまでは至らず、一撃を胸部に喰らってしまった。

「っ・・・せいやあ!!！」

「何!？」

タイキツクで一瞬だが空中に浮いたオーズはそのまま空中で体制を建て直しウナギウィップでスネークDを捕縛。そのまま地面に着地するとボルタームウィップを発動し電撃を鞭から流し込む。

「ぐおおおおお!？」

「はあ!！」

そして電撃を流し終えた後、ライオンヘッドからライオネルフラッシュャーを発動し敵の目をくらませる。

「っ……目くらましか!？」

？ライオン!トラ!キツネ!？

オーズは手早くメダルを入れ替えてラトラツネにチェンジ。キツネレッグの能力でゴミ山の斜面を高速で駆け抜けけるとトラクローで空中からスネークDを切り裂く。

「っ!？」

そしてスネークDが再び体制を整えるとオーズは素早くバックスアップで距離を取る。だが、その瞬間に……彼らの間には世界をつなぐオーロラが現れた。

「え!？」

「ほう……あいつがくるか……」

スネークの眩きとともにオーロラをくぐってきたのは……

「見つけたぜ・・・財団X!!」

前面は黒、後面は緑と非常に目立つカラーリングをしたバイクにまたがる青年だった。彼はヘルメットをバイクに置くと左腰に吊り下げていたソフト帽をかぶる。

「えっと・・・あなたは？」

「おっと、お前がこの世界の仮面ライダーか？」

「あ、はい。俺は神童永司。仮面ライダーオーズです。」

「オーズ・・・か。俺は澤木翔太郎。仮面ライダーWだが、今は・・・」

? Joker?

「変身!!」

? Joker?

「仮面ライダー・・・ジョーカーだ。」

この世界の戦いがさらに激しさを増していく事を伝える・・・その使者、仮面ライダージョーカーこと澤木翔太郎がひぐらしの世界に現れた瞬間だった。

第9話 変化と財団と運命の切り札（後書き）

ラストに出てきた翔太郎は「仮面ライダー new story」での現在、絶賛執筆再開中の劇場版終了後の翔太郎です。追々、翔太郎がこの世界の来た理由をそっちで明かしたいと思います。

感想と質問待ってます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6921t/>

仮面ライダーオーズ×ひぐらしのなく頃に 永崩し編

2011年12月30日03時48分発行